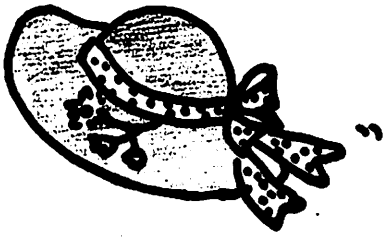
ぶどうの木

第 17 号

八幡前田教会
基督伝道隊　大濠公園教会
戸畑教会



目次

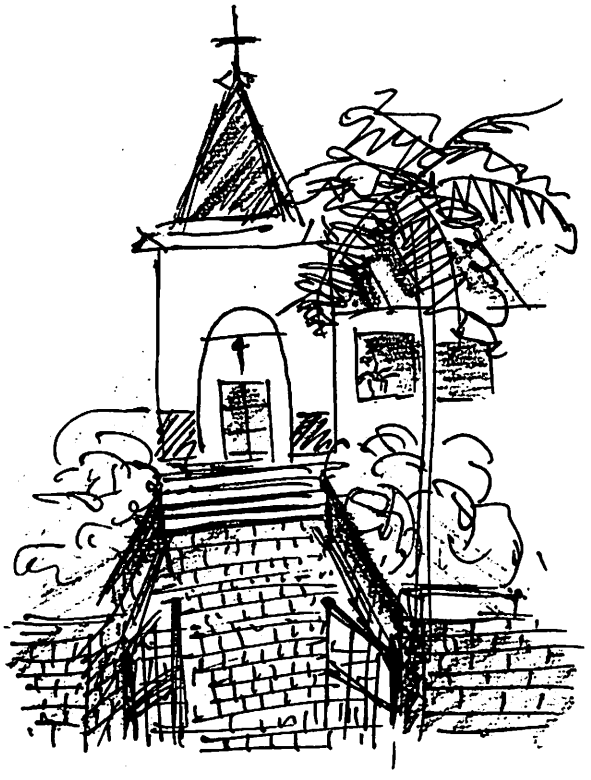
巻頭言……榎本牧師（1）
榎本牧師全快感謝会……大濠公園教会（2）
北九州市史（記事抜粋）……（13）
前田教会に導かれて
入信当時の思い出……高木敏夫（14）
わたしが教会に導かれた当時……野村美恵子（19）
わたしが前田教会に来た頃……長尾千枝子（20）
前田教会の印象……H・T（21）
教会に導かれて……廣田千恵子（21）
私の歩み……水村静江（23）
幼い日に……河本信生（24）
奇跡の神の恵み……野村末義（25）
エステル会研修旅行に参加して……筑山寿々子（28）
みんぱく……伊規須太郎（30）
信頼にお答え下さる……櫨木スミ子（32）
ああ感謝なるかなエステル会研修旅行…伊規須泰子（34）
感謝……廣田蓉（38）
一年の感謝……大口和子（40）
雲仙研修旅行に参加して……島崎博子（42）
ソ連捕囚物語（一）……高木敏夫（43）
なんとか神様（私の失敗）……緒方とみ子（45）
エステル会研修旅行に参加して……高木ツルエ（46）
主人が救われて……川越シヅエ（48）
リューマチ奮戦記……貞サユリ（50）
エステル会研修旅行記……野村美恵子（54）
今、思うこと（二十歳篇）……木原桂子（56）
祖母の思い出……林磨璃子（57）
詩「イエス様」……瓜生美知子（58）
エステル会研修旅行に参加して……岩隈多賀子（59）

母から娘へ……K・M（60）
今は恵みの時……匿名（63）
道……緒方とみ子（63）
手術の後に残された愛の糸くず……綾部時男（64）
心の記録（旅の思い出）……貞サユリ（69）
主による勝利の喜び……大口和子（71）
祈り……瓜生美知子（72）
SAVE FROM DEATH……ANONYMITY（73）
収穫……緒方とみ子（74）
父の思い出（一）……正野真宏（77）
編集後記……（83）

巻頭言

榎本利三郎

わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。（ヨハネ15・1）



父なる神様の憐みで、九州の地に植えられた、小さな、小さな、ぶどうの木も、日毎、年毎、恵みの御手に守り、支え、養われて、実を結びました。初め若枝は数は少なかったが、馨り高い、信仰の実を結び、後につづくものに良き霊の種を残して、今「ぶどうの木」の17回目の収穫の時を迎えました。

完熟した果もあり、未熟な酢っぱい実もあり、虫食いの実ありですが、どれ一つも捨てる実がありません。夫々が創り主の栄光と恩恵の馨りと色彩を放って居ります。

教会も戸畑、八幡、福岡とそれぞれまだ若木で元気一パイ、農夫の期待に応えて、枝を張り多くの霊の実を豊かに結ばせて頂きましょう。次の収穫期を楽しみに主の業に励みましょう。

一九八八・一二

榎本牧師全快感謝会

昭和六十二年四月
福岡大濠公園教会にて

司会（和義）

礼拝の中で、お証詞がありましたように、昨年十二月二十三日に福岡での火曜会と夜の燭火夕拝（キャンドル・サービス）がございまして、翌日二十四日が八幡前田教会での燭火夕拝でした。その時すでにだいぶ疲れていたようでしたが、本人は何も申しておりませんでした。その次の日、二十五日には私の弟の家族が浜松から来ることになっていました。父はそれを楽しみにしていまして、普段は朝もゆっくり休むのですが、その日はいつもより早起きをして、弟の家族に新鮮な魚を食べさせたいと、張切って魚を買いに出かけました。とても元気な様子でした。私と家内はその日の午後から一晩泊まりで、家内の里に出かけて、翌日二十六日に昼過ぎ戻って来ますと、父はすでに発熱で休んでおりました。

弟の話によりますと、二十五日に夕方、八幡に到着すると父はまだ寝てはいなくて、孫たちと再会を喜んで、一緒にお祈りをしたそうですが、そのまま「疲れたから、今日は夕食もいらない。早く休みたい」と寝室へ入ったそうです。実は、その夜から熱が出はじめて、どんどん高くなり、二十六日になっても、あまり下がらず、水枕と氷嚢とで冷していました。私共が二十六日の昼過ぎに戻ってみましたら、ベッドの中に小さくなって、熱のためかじっと身動きせずに寝ておりました。

弟が言いますには、熱が非常に高く心配で、早く病院に連れて行きたいのだけれど、本人が風邪だからすぐなおると言うので、暫く様子を見て居るとのことでした。その日は私も気になりながら、夕方には福岡へ戻りました。

次の日は二十七日土曜日でしたので、様子を知りたくて電話しましたら、あまり熱が下がらないので、八幡の教会員でいつも父の健康を管理していてくださるお医者さんに見てもらいたい、と本人が言うので、その方に来ていただいたら、単なる風邪だろう、と言うことで、点滴をしていただき、解熱剤を貰って熱も治まったようだ、とのことでした。

その時も、本人が電話で「大丈夫だ。明日の礼拝のご用も出来るけれど、新年聖会があるから、仕方無く明日のご用はほかの方にお願いしたから」と申しておりました。それで私も安心していました。ですから、大濠の二十八日の週報には「一月一日から三日まで、基督伝道隊の新年聖会が八幡前田教会で行わ

れます」と書きました。二十八日に礼拝がありましたが、礼拝後に父から電話がありまして、「大丈夫だ。新年聖会はやれるから」と伝えてきましたので、私共も新年聖会へ出かける準備をしておりました。

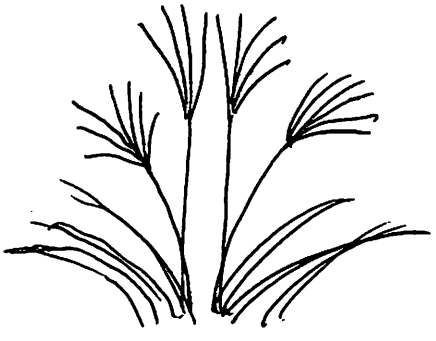
ところが、二十九日の夕方三時ごろに、出先から帰って参りましたら、母から電話がありまして、その日の午前に父が入院した、というんですね。まったくビックリしまして、これこそ晴天の霹靂といいますか、災いは突如として起きるというか、どうしたらよいのかわかりませんでした。とにかく、新年聖会は出来ませんので、各方面の方々に早速通知をいたしました。皆さんの中には新年聖会に出かける予定でお正月の準備をしておられない方もいらっしゃいました。私共も冷蔵庫を空っぽにしていましたので、早速買物をしなければなりません。そんな訳で、皆さんに連絡をしましたが、これからのことや、病状が気になっておりました。

二年前の肺炎の時と同じように考えて、入院したら一ヶ月位でなおると思っていました。しかし、今回は熱が高くて、なかなか下がりません。三十日に私は病院に行ってみました。父は高熱にもかかわらず、比較的に元気で、新年聖会が出来なくなって残念だけれど、一月十五日から予定していた大濠での聖会は何とかやれるのではないかと言っておりました。

新年の標語の手配や集会のスケジュール等を打合わせて参りましたが、熱が高く、自分で動くのが大変な様子でしたので、その夜から母が付添って泊まることになりました。

熱が三十九度から四十度以上になりますので、座薬の解熱剤を使いますが、四時間から六時間で切れてしまいます。座薬が切れ始めると、スルスルと熱が上がり、次の座薬が効き始めるまで一時間程かかりました。薬で熱が下がりだしますと、今度は汗が盛んに出てまいります。下着から寝間着、シーツ、バスタオルまでぐっしょりと濡れてしまいます。その度に全部着替えて、取りかえて、体をお湯で拭いてやります。これを夜昼となく数時間置きに繰返して居ました。

入院した時にレントゲン写真を取りました。その写真を見ますと肺の病巣は小さく、二年前の写真よりも小さい位でしたから、主治医の先生も単純な肺炎で二週間もすれば退院出来ると思っておられて、



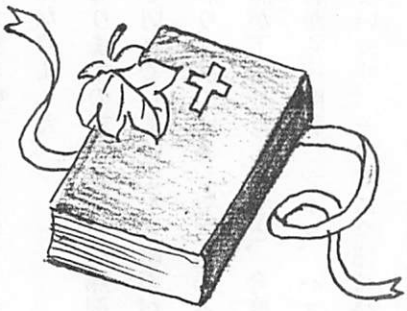
父にもその様に告げていた様です。しかし、入院して点滴が始まり、一日に九時間から十時間も続けて点滴をしますが一向に容態が好転しないものですから、主治医の先生がもう一度レントゲン写真を詳しく見てくださいました。三十一日の十時過ぎに弟から電話がありまして、今先生に呼ばれて父の病状に就いて説明を受けたが、写真を良くみると肺炎ではないようだ、尿にも鮮血が見られるので、腹もはって腹水が溜っているようだから癌の疑いがある、しかも、肺の方は他からの転移ではないか、と言われ、正月中は詳しい検査が出来ないので断定は出来ないが、疑わしいのでそのつもりで、と言われたそうです。

あまりにも突然な事なので、私も何と言ったらいいのかサッパリ見当が尽きませんでした。しかし、まだ確実な検査結果によるものではないので、結果が出るまでこのことは伏せておくことにして新年を迎えました。

一月一日の新年礼拝が終わって病院へ行ってみましたが、様子はあまり変化がなく、私共も暗い思いでした。四日は聖日礼拝でしたので、週報の報告をどのように書こうかと、とても苦労しました。ここにはこう書いています。「牧師の病状は変化なく、依然熱が続いていますが、主に守られております。続けてお祈りください」　最悪の状態ですと書きたい思いでしたが、まだはっきりしていませんので、こういう書き方になりました。

翌日、五日が病院の仕事初めで、検査を行う事になりました。血液検査、尿検査、レントゲン検査、腹部の超音波検査など、あらゆる検査をいたしました。主治医の先生も心配だったのでしょう、すべてを一番始めにやってくれました。その間も相変わらず高熱が続いていました。お昼ごろ、超音波の検査の時、検査室へ連れて行くのに自分で立上がるのも無理な状態でしたが、なんとか車椅子で連れて行きました。この日まで弟の家族が滞在していましたので、昼間は弟が看病して夜に母が付添うようにしていましたが、次の日に弟の家族が浜松に帰るので、夕方、孫たちを連れてお別れに来ました。この時まで父もまだ元気があり、泣きながら別れをいう孫たちを励まし、祈って別れました。

六日は母が昼夜と付添っていました。検査結果が気になりますが、主治医の先生は何もいわれません。七日にお昼前に私が病院へ行きましたので、先生を院長室に訪ねて検査結果を伺いました。その結果、癌の心配は無いが、肺炎であるけれど細菌による単純なものではなく、ヴィールスによる異型肺炎で



あろう。ただ、その先生は呼吸器の専門ではないので、よくわからないから、産業医大から専門の方が来ておられるので、その先生にレントゲン写真やその他のデータを送って診断を願っているので、その結果がはっきりするまで分からないが、いずれにしても、極めて危険な状態であり、自分の経験からではこれまで助かったことがないので、まず命は難しいという事でした。

検査結果を心配していた母に医者の言葉を伝えて、父には告げるべきか、尋ねました。母は父がこれまでなんでも話すようにと言っていたから、このことも本人に言ってくれ、と言いますので、私は父にすべてを話しました。父がどんな気持か分かりませんでしたが、「そうか、わかった。お祈りしょう」と言って、一緒に祈りました。

私が病院にいる間に、母が家に戻って着替えをしたり、入浴を済ませて病院に戻るようにしていましたので、その日も午後は私が父の側に就いておりましたが、見ていますととても呼吸が速くなって、数えて見ると一分間に三十三回から三十五回ぐらいになります。非常に息苦しい表情をしているので、看護婦さんに頼んで酸素吸入をしてもらうことにしました。呼吸の回数は余り変化はありませんでしたが、気分は良くなったようです。この頃が一番ひどい状態でした。頭の芯がボーッとしている、といっていました。この酸素吸入は一週間程続きました。

発熱の方は、次第に座薬の効果が長く続くようになりました。十時間ぐらいから十二時間程になり、さらに、十四時間以上にと伸びてきました。しかし、見た目には状態が益々悪化しておりまして、急速に体力が衰えてきました。話も長く続けられないようで、一言話しては暫く休むような状態でした。ですから、熱が出ないのはその体力も無いのでは、と心配しました。それで、東京の兄にもちょっと来てもらった方がいいのではと思いまして、電話しました。それまでも病状を伝えていましたが、現状を見ないので余計に悪く想像して心配だったようです。

兄が参りましたのが九日の金曜日でした。十二日に帰るまで、兄が母と交替して病院に泊まり込んでくれましたが、母は家に帰っても落着かないようで、夜もゆっくり休まず、朝は早くから目を覚まして、六時過ぎには病院に出かけるような状態でした。病院にいて父の様子を見ているほうが安心なようでした。

十二日に再度レントゲンをとり、血液検査をいたしました。熱も余り激しくないので、薬がきいてよほど良くなっていると期待していましたが、結果はとても悪い状態でした。レントゲン写真は前回より悪くなって、肺のほぼ全域に病巣が広がっていました。主治医の先生は内部が非常に悪い状態なので油断できないと言われました。

八幡の教会員のお医者さんも心配で毎日父を見舞ってくださいまして、その方が病院のレントゲンの技師の方と親しくて、見舞って帰りに廊下で技師の方に呼びとめられ、「榎本さんはお気の毒ですね、フィルムが真黒でしたよ」と言われて、「ああ、もうだめだ」と思われたそうですが、それもこのころのことでした。

しかし、十四日頃になりましたら、次第に呼吸が治まってまいりまして、熱も薬でコントロール出来るようになりました。それでも一日に六本ぐらいの点滴は続いていました。点滴は十時間ぐらい続き、終わるのが夜の九時頃になります。この頃から、熱が出ない時には食欲も出るようになりました。それまでは、食事もほとんど食べれない状態で、病院食を三分の一ぐらい食べれるくらいでした。ですから、母がなんとか食べれるようにと自宅からあれこれと病室に持込んで洗面所は小さな台所のようでした。梨を擦りおろして絞ったジュースとリンゴのジュースを混ぜたものを好んで飲みましたので毎食作っていました。そのほかにも、入院した頃は朝食にコーヒーとトーストを持っていったり、お正月料理を持っていったり、刺身を用意したり、とにかく、命のある間になんでも食べさせたいと思ったものでした。

十五日頃から容態が良くなってきました。酸素吸入もいらなくなり、熱も七度から八度ぐらいで落着いて来ました。十九日に検査があり、レントゲンも写しましたが、結果は前回よりもずいぶん良くなっておりました。この頃から、顔の表情も生気を帯びてきました。食欲も次第に増して参りました。熱による汗も無くなり、着替えの必要もいらなくなりました。しかし、主治医の先生は危険な状態は過ぎたけれど、まだ内側にヴィールスが残っているから油断できない状態だ、と言っておりました。二十五日の週報の報告には「牧師の病状は僅かながらですが日々に快方に向かっております」と書いております。確かにこの頃は少しずつ良くなっておりましたので、本人も気分が良くなって、盛んに話をするものですから、その後でガタッと疲れるので、先生からもあまり話をしないで安静にしておくようにと言われました。

一月の末になりまして、少し起きてもいいだろうと言われるようになりました。二月の一日の週報の報告を見ますと、「牧師はお祈りに応えられて、日々、順調に回復しております。ベッドを離れて動けるようになりました」としるされています。この時にはトイレまで自分で行けるぐらいの状態になって参りました。しかし、まだ動くとすぐに熱が少し上がるようでした。不安定な状態が続いていましたが、二月八日頃には安定して参りました。病院の中を散歩できるようになりました。二月八日

の週報には次のように書いております。「牧師は祈りに応えられ、日増しに元気になっておられます。病院内を散歩できるようになりました」。そうなると、早速ズボンとセーターを持って来るように、と言いますが、まだ外は寒かったので医者の許可が出るまで待つように申しました。

病院に付添っていた母も二月の三日には自宅へ戻ることが出来ました。九日からの一週間はぐんぐん体力も増してきて、退屈するような状態になりました。十四日にやっと外泊の許可が出ました。これはとても嬉しいことでした。というのは、前回肺炎で入院した時に、外泊の許可が出て一週間で退院できたからです。十四日の午後、家に約五十日ぶりで帰って来ました。さっそく、散髪にいって、さっぱりとなりました。翌日の十五日の礼拝のご用をすると言いましたが、皆に止められてその日は休息させて戴きました。その夜六時半頃、病院に戻りました。

病院に戻る時は少し寂しそうな顔をしていました。あと一週間で退院出来るからと励ましていましたら、翌日十六日の午前に電話があり、もう今から退院して良いと言われたので、すぐに帰ると言ってきました。それで、とにかく病院でお昼を食べてから、退院するように準備しました。こうして、外泊の後に一晩だけ病院で過ごして退院出来ました。以上大体の経過をお話いたしましたが、今日こうして福岡まで出てくることが出来ましたのも、多くの兄弟姉妹のお祈りに神様が真実に応えてくださった事であると深く感謝しております。

それでは、父のほうから一言。

「どうもありがとうございました。まあ本人はほんとうにわからないんですね、ことに熱の高い間はもうろうとしてしまって、ある意味ではベールをかけて物を見るような感じで、だから信者のお医者さんが、「先生、目が見えなくなるようなことはありませんでしたか」と聞かれたのを後から思い出しまして、ああ、このことかと思いました。ある時期になりましたら、そのベールがすっと取れて、ああ、やっとはっきり見えるようになった、ということを経験したことがあります。熱で視神経がやられるのではなかろうか、とその時初めて気が付きました。まあ、そういう中を通って参りましたので、熱の高い時のことを私は全く知らないのです。

しかし、今報告にありましたような経過の中で、私の一番の支えと言いますか、もちろん先程申し上げました様に神様が支えてくださるけれど、その後ろで皆さんが本当に真剣に祈って

くださっている、その祈りに答えて神様がこの様に支えてくださっているんだといたいほど感じました。そういう意味で、神様にお勤めではなく、真実に心を込めて皆さんが祈ってくださっている、その祈りに現実に答えられて、死ぬはずの私、もう額縁の中に入っている私ですが、今こうして皆さんと感謝出来るようにして頂いた。このことを私は本当に言葉に表わせない感謝をもっておるわけです。それは今日教えられた様に、「あなたの信仰があなたを救ったのです」。あなたの祈りが私をこうして立たせているんだということを皆さんしっかり心に受け止めて、これからも、どんな問題でも、皆さんの祈りに神様が答えてくださるのだということを覚えていただきたいと思います。

こういうような病気の中を通らせていただきましたけれども、これは一つも無駄ではなくて、神様が皆さんに直接祈ることを教えてくださった。主に信頼することがどういうことか見せてくださる。また、主はその信頼にいかに真実なお方であるかということをこうして見せてくださる一つの機会じゃないかと、今、神様に感謝しています。

だから八幡でもそうなんですね。普段声を出して祈ったことの無いご主人が、「先生が病気、そりゃ、大変だ」といって、一生懸命で祈ってくださった。声を出して祈ってくださった。それから声を出して祈るようになったと奥様がお証詞していらっしゃったんですけど、まあ、そういう意味でお一人お一人のために、神様が必要な行程を通らせてくださったんだな、と思いました。

それともう一つは、だからそういう中にあって、主は生きていらっしゃる、ということを肌で手触る様に、いつも申し上げるように、信頼させていただいて、事実その信頼に答えてくださるお方を経験してきましたもんですから、お医者さんが見込みがないかもしれない、ということを聞いているもんですから、生きるも死ぬも神様の手の中で、私がどうこう出来ないし、お医者さんもどうこう出来ないし、神様の御旨がどうあるかわからんけれども、言うべきことを言って置かなければ、ものが言えなくなってからでは遅いからと、和義に一生懸命で言うた訳なんです。その時、だからちょっと調子がいいと喋りすぎたけれども、私としては、やがて主の前に立つ、明日か今晩かわからない、五十年先かもわからない、それはわからないけれども、何時立たせられてもいいようにして置かなければいけない、そういう気持があったものですから、一生懸命話したわけです。

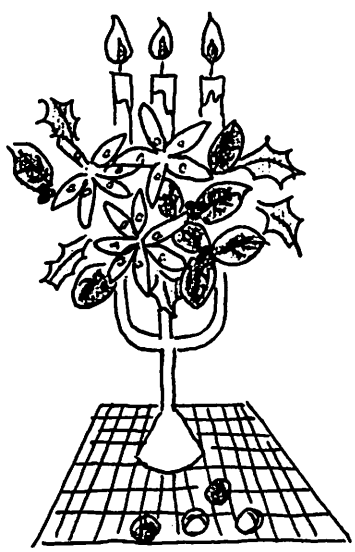
しかし、その中で、今現実甦った主がこんなに信頼するものを支えてくださる、この主に信頼して行けば大丈夫だから、他のことは一切忘れても、この主に手触るような生活をするとと

もに主に信頼して、皆さんに主を信じていただくようにお勧めしてほしい、と言う気持から、そのことを一生懸命話したと思います。

そのことは残っていますけれども、しかし、あの呼吸困難の時はさすがに息苦しいですね、熱で中から体力を消耗してしまっているものですから、呼吸が苦しい。こんなに苦しいということは初めてだったんですけれど、その後、今もそうなんですけれども、熱が下がって退院するころでもそうでしたけれども、腹式呼吸、深呼吸ができないんですね。深く呼吸するとひっついている紙をばらばらと剥ぐ様な感じがするんです。それでも、それが剥げて二度とくっつかなければいいのですが、たんびたんびにビリッと剥ぐ様な感じがするのです。だから、これは熱で体力が落ちて機能が衰えてしまったのじゃないだろうかと、これは私自身の判断なんですけれども、まあ、それが当たっているかどうかわかりませんけれども、神様は万物を新しくする方だから、内側からまた新しくしてくださるからまあいいわ、と思ってですね、気を長くするといいますか、主治医さんからも非常勤管理職だから気を長く持ちなさいといわれております。どうも駆け出すものですから。私にいうには「うちてし止まん」をすてなさいと。

でも私は捨てません。神様は死んで生きると書いてあるから、命を掛けて信頼していくと、この様に生かしてくださるんだから、私は相変わらずですけれど、その方は信者ではないから、そういっていろいろと気を使ってくださるんだと思って、今は感謝しています。八幡の皆さんもそういわれるのです。「先生、細くてもいいから長く御用をしてください」と。まあ、細いか太いか、それは神様の導きに従ってどうなるかわからんけれども、御用させて頂く毎日毎日が感謝です。

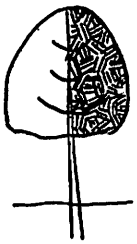
また、そういう中を通らせていただいたので、何一つ頂くのも感謝ですね。今までも、健康な時から感謝はしているけれども、実際にその中を通ると、本当にお茶一杯飲めることが「ああ、お茶が飲める！」と感謝出来る様になりました。だから、健康な時に、そういう感謝をしておくと、病気にならないですんだかもしれん、と思うんです。



詩篇の百三篇に、「そのすべての恵みを忘れるなかれ」と書いています。ついこう日にちがたち、健康になると、苦しかったということはわかるが、どの程度に苦しかったかということを忘れてくるんですね。弱いですね、人間ていうやつは。私は今しみじみ思いますのは、報告を聞いていましてなんだか昨日の晩に見た夢を、はあ、そんなもんかと聞いているような感じになっちゃうんですね。実際は夢じゃない、現実だったんです。けれど、それが夢だったかのように、なんていいますか、ぼけてしまうといいますか、恵みに慣れてしまうのです。これが、私はこわいなと自分で警戒するわけです。

だから、ここまで神様が支えてくださったのだから、これからは恵みに感じて本当に主の前に感謝して生き行きたいと思います。

あのヒゼキヤ王様は死ぬ時になって、主に願って十五年命をのばしていただきましたが、私が熱が高くて、医者からもいわれて見込みがないので、家内は何時神様は召してくださるかわからないが、これが神様の御旨なら、といっておりましたが、本心はもう少し命をのばしていただきたいのですと。それじゃ、本心でお祈りしたらいいよ。（笑い）



神様は建前よりも本心を見て答えてくださるから、といったんです。神様、どうぞヒゼキヤ王様を十五年のばしてくださった神様、命をのばしていただきたい、とお祈りしたのです。神様はその本心の祈りに答えてくださって、まあ十五年か何年か知りませんけれども、こうしてのばしてくださったわけなんです。だからこの前、八幡の一人の方にその話をお証詞したのです。そうしたら、「十五年ですか。たった十五年ですか。二十年、三十年でも」とその方がいっておられたのですが、とにかく、神様の前では義理や格好や建前はどうでもいいのです。本当に、真実に、心からぶつけて、それが良くても悪くても、悪ければ「ごめんなさい」で、また信頼すればいいのです。だから、皆さん、信仰生活は肩の張った、堅苦しいのではなく、裸でぶつかって行くのが信仰なんです。そうして信頼し、こうして癒されて、また元気にして頂いて感謝すればいいのです。

それで、その中で教えられたことは、残務整理のために神様がこの時をお与えになったんだということです。教会の御用をいろいろやりっ放しにしてきたものですから、ここでポッと取ってしまったら後が困るから、神様が整理しろということで、もういっぺん送り帰してくださったんだと思っています。それで、整理しろといわれても、さて、和義がこうして献身してきたのはいいですけれど、八幡の牧師になるわけにはいかんし、

皆さんが大濠に牧師さんが与えられたと、まだ牧師ではないんですけど、まあ牧師が与えられたと喜んでいらっしゃる。取りあげる訳にはいかないし……しかし、和義をあの中から献身させてくださった神様、石をもアブラハムの末と変えることの出来る神様、私をあの死ぬべき所から生かしてくださった神様、どんなことでも出来る方だからとお祈りしていました。そうしていましたら、二年間中学の先生をしていた方が「先生、今度学校を止めます、と校長に言渡して来ました。ですから、献身させて頂きたいから、訓練させていただきたい」といわれたんです。校長さんにさよならをしてきたんですね。家の人にはというと、家の人にはまだいっていません、先生からのお許しを得てから、家の人に報告してくるつもりです、というのです。私はその申出を聞いて、はあ、神様が道なき所に道を設けるとおっしゃる。この人がどういう道を辿るかわからない。神様が導いてくださるんだから、人にはわからないけれども、少なくともここで最後の、まあ最後になるかどうかわからないけれども、この御用をさせていただくために、私をこうして整えてくださったのかなと、また、この若い兄弟が、純真な気持ちで神様に信頼して従って行きたい、というその願いを神様がどういうふうに導いてくださるか、それは私にはわかりません。けれども、私共もそれが神様から出たものであるなら、これは主の御用として、大事に全うして行かなければならない、ということで受入れ体制を作っていかなければならないと思っているのです。

そういうことで、神様は道なき所に道を設けるお方、本当に今の今までどんな状態であろうと、神様の御旨であればどんなことでもしてくださる。私共の大切なことは神様にまず従うこと、信頼すること、その結果は、あとは神様が責任をもってくださる。現実にこのような中で、教会は活けるキリストの教会である。だれの教会でもないんだ、ということですね。だから神様が責任をもってくださっているのだということを、もう一度、新しく、私は教えていただきました。

だから、一つの病気だけでなく、病気で苦しかったんですけれども、その中を通ったものでなくては、また、一緒に通ってくださった皆さんでなくては知ることの出来ない神様の恵み、それがこんなに豊かだっていうことをこの度の状況を通して知らせていただきました。

どうぞ皆さん、そういうお方が皆さんの信頼する主であるということを心において、その主に喜びをもって、感謝をもって、思いきって信頼していただきたいと思います。

司会者（和義）　それでは、続いて看病をしました、母の方か

ら一言。母は弱いものですから、私共は一番心配しました。途中で母が病気でもしたら大変だと思ったんですね。病院の小さな堅いベッドに寝て泊まり込むわけですから。しかも夜もぐっすり寝れませんし、いろいろ用事もありますから、大丈夫かな、と思っておりました。

ところが、母の強さといいますか（笑い）、非常に強いんですね。私共が交替しようというと、「いやだ」というんですね。まあ、お父さんの顔をいつも見ていないと安心しないんですね（笑い）。そういいまして、決して代わろうといわないんです。家へ用事があって、戻っても、すぐに病院へ帰ることを考えるんです。それだけ心配でもあったんですね。自分のいない間に、今、急に何か変化があるんじゃないかということを絶えず恐れていたのかも知れませんが、とにかく、驚くような力を与えられて、ほぼ四十日位泊まり込んだと思います。兄が来て、三晩ほど泊まってくれましたが、その間も電話を掛けたり、用事をしたりと夜遅くなりますが、朝になると四時頃から起きるのです。普段は八時か九時まで寝ているのですが、四時頃から起きて、出かける用意をして、六時半になると、さっさと病院へ出かけて行きます。これにはびっくり致しました。その間いろいろ考える事もあったでしょうから、一言どうぞ……。

今日、皆さんとお目に掛かることができて、本当に感謝でございます。背後で皆さんに熱い祈りを捧げていただいて、主がこの様な恵みを与えてくださり、ありがとうございました。私はいつもあそこが痛いここが痛いと、しょっちゅういっているような弱い者なんですけれども、あの病院にいる間は全くなんともなく、睡眠不足をすると翌日頭が痛くて、起きられないといった私なんですけれども、頭の痛いのもなんともなく（笑い）本当に皆さんが祈ってくださっているんだなとそれが身にしみて感じられました。神様がこうして生かしてくださった、神様が力を与えてくださったな、と思って感謝でございます。

入院した始めは、二年前と同じ様に、また化成病院に入院したから、暫く休んだらまたすぐ退院できるという軽い気持ちで、家にいるよりも入院した方が良かった、ぐらいに感じていました。でも、だんだん病状がひどくなりましたもんですから、ああこれは神様が召してくださるのかな、と思いました。四十七年か四十八年になりますか、主がこの様に御用に召していただき、今日までこんな恵みの中にいれていただいた、もう神様が何時召していただいても感謝ですと申しあげたいんですけれども、先程申しましたように、神様、御心に適いますなら、ヒゼキヤ王様を十五年のばしてくださったように、もうしばらくの命を与えていただきたいんです、とお祈りいたしました。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」とヨハネ十四章のお言葉を最初に与えられていたんですが、私がフーと状態を見ては心がぐらぐら、もうだめじゃないかと思うその時にも、「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」とこのお言葉がもうついて離れませんでした。本当に、このお言葉に支えられて、神様に力を与えられたと思います。皆さんのお祈りであることを感謝しております。ありがとうございました。

北九州市史（抜粋）

第三篇　宗教

第三章　キリスト教

（十一）　基督伝道隊

八幡前田教会　昭和五年、八幡市高見の八幡製鉄所社宅で、基督伝道隊福岡基督伝道館牧師、折滝鶴治郎によって光をかかげたのをもって始まる。現在地前田に基督伝道隊八幡基督伝道館として看板をかかげ聖日礼拝、日曜学校、伝道会を開始したのは昭和十年である。昭和十六年、「日本基督教団」第七部に編入、八幡前田教会となった。

西南女学院での活動　昭和十六年、宗教教育さえ禁じられた西南女学院で榎本利三郎牧師は、非常勤講師かつ部外者として、賛美歌、祈禱、聖書を通して、学徒動員中の生徒を励ましている。昭和二十年、教会堂、牧師館が全焼した。

戸畑に伝道所　昭和二十一年、伝道活動を再開、市民に希望と慰めを伝えたいと願った。昭和三十五年、戸畑に伝道所を設ける。昭和四十九年、日本基督教団との包括関係を廃し、基督伝道隊を再組織し、毎聖日北九州各区から、また宗像、徳山、筑豊の各方面から、多くの信徒が礼拝に集まり、北九州市民に福音の感化を与えている。

前田教会に導かれて

入信当時の思い出

高木敏夫

私が初めて八幡前田教会の門を叩いたのは、昭和二十六年五月二十日の聖日であった。

私が会堂に入った時はすでに礼拝が始まっていた。私は窓ぎわの後ろの椅子に腰を下ろした。会衆一同大声で讃美していた。今まで三ケ月間求道していたE教会とは、その雰囲気が全く違うように感じた。

やがて牧師先生の説教が始まった。先生は年のころは四十過ぎだろうか、モーニングを着用していた。背が高く、色は浅黒く、額は光りを放っていた。その風ぼうは威厳があり、旧約時代の預言者を思わせた。

先生の口をついて出る言葉は力強く、私の魂にぐいぐいと食いこんできた。「暗黒の地に住む人々の上に光が照った」とあるが、説教を聞いているうちに私の心は明るくなった。私は直感的に、「私が長年求めていたものを満たしてくれるのはこの教会だ」と確信した。

この日から私の前田教会での求道生活が始まったのである。

私は榎本先生のご説教を一言も聞きもらすまいと、そのお顔に目を注ぎ、耳を傾け聞き入った。

当時、前田町一帯は人家がまばらであった。米軍の空襲で焼野ケ原となり、その後復旧があまり進んでいなかったのである。そんな中で、緑色に塗った前田教会の存在は、ひときわ目立っていた。

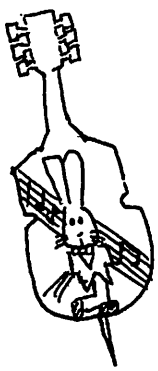
教会堂の玄関は、会堂正面よりやや左側にあった。扉も矢張り緑色に塗ってあったが、少しはげかかっていた。上部に木の札がかけてあり、「日本基督教団八幡前田教会」と墨で書かれていた。会堂の中は、杉板造りの長椅子が、七―八脚ずつ二列に並べてあった。右側の窓ぎわにも、縦に二脚並べてあった。

六月二十四日礼拝後は、総会の日であった。私は求道者であるので玄関に帰りかけていた。その時、野村さんが近づいて、総会に残るようすすめて下さった。

やがて総会が始まった。榎本先生が私を講壇の前に招き、皆さんに紹介して下さった。

私はその時、皆さんにこんなあいさつをした。

「皆さんこんにちは、私はこの教会にくる前に、E教会で三ケ月の求道生



活をして来ましたが、今後はこの教会で求道していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。私は聖書の事は何もわかりません。前の教会では、聖書の箇所がわからず、まごまごしているのに知らんぷりでした。この教会ではそんな事がないようにお願いします」と言った。皆さん一同大笑いされた。

総会後、先生から個人的に、「E教会のM牧師には、今後前田教会で求道する旨をはっきりと伝え、了承を得なさい」と助言をいただいた。私は早速そのようにした。これで私は、晴れて前田教会の求道者として出発したのであった。

七月二十八日、私は感謝の意を表わすため、初めて牧師館を訪れた。時に先生ご夫妻は昼食中であられたが、私を快く迎え入れて下さり、一緒に食事をするようすすめて下さった。生来遠慮というものを知らない私は、御好意に甘えることにした。夫人が旧軍隊のアルミ食器にご飯をよそって下さった。私は当時、食前の感謝なるものを知らなかったので、そのまま箸を口に持っていった。すると先生が、「一言お祈りしましょう」と感謝の祈りをされた。私はあわてて箸を下に置いたが、内心恥ずかしかった。

この日を契機に私の牧師館通いが始まったのである。集会のない日は、「先生、今日は何かすることはありませんか」と、まるで御用聞きのように毎日訪れ、先生に近づいた。

私は牧師館で、先生ご夫妻の私生活を通していろいろと教えられることが多かった。「牧師館のお茶を飲む回数に比例して恵まれる」ということを聞いたが、これは確かに一面の真理であると思った。

その頃の先生ご一家の家族構成は、先生ご夫妻と長男の俊雄さんが小学四年生、次男の和義さんが三年生、長女の咲子さんが入学前、三男の誠ちゃんが生後四ケ月の赤ちゃんであった。合計六人である。

先生は、当時健康のすぐれなかった夫人をいたわり、病気の誠ちゃんを看病のかたわら、炊事、洗濯、掃除、水汲み、薪割り、風呂たき、アイロンかけなど何でもされた。驚く程手ぎわがよく、しかも早かった。それでいて夫人に対して〝してやってる〟というような素振りはみじんも感じられず、お二人の会話には笑い声が絶えなかった。それまで、「オイ、コラ」式の夫婦生活しか知らない田舎者の私にとって、すべてが驚きであった。

私が初めて牧師館を訪問した二十八日には、もう一つの嬉しい事があった。それは、東俊郎兄（大阪府八尾教会牧師）と妹の泰子さん（戸畑教会伊規須太郎牧師夫人）と知り合いになれたことである。この二人とは早天祈禱会で顔を合わせていた。彼らは仲良く連れ立って各集会に出席していた。私は、彼らが

兄妹なのか、恋人なのか、それとも新婚の夫婦なのか大いに関心があった。それがこの日お互いに自己紹介して知り合いになれたのである。そして二人が兄妹であるということもわかった。この日以来、私たち三人は急速に親しくなった。格別東兄と私は、ダビデとヨナタンのような信頼関係で結ばれた。

当時東兄は、田舎のお医者さんが下げているような、旧式のカバンを下げ、下駄ばきであった。妹の泰子さんは、高校を出たばかりで年頃なのに、なりふりは一向に構わず、一途に神様を求めていた。東兄は、泰子さんを「やっこちゃん」とやさしく呼び、泰子さんは、「お兄いちゃん」と甘えた声で呼んでいた。私はこの兄妹の仲の良さに内心うらやましかった。私にも妹がいるが、二言目には頭をポカリとやったもので、実に天地の相違である。

東兄妹より少し遅れて、伊規須太郎兄と知り合った。彼は現在、戸畑教会の牧師である。当時の彼は、旧海軍の何種軍装とかいう草色の服を着ていた。その動作には節度があり、人と相対する時はびしっと両足を揃え、直立不動の姿勢をとった。彼は旧海軍兵学校出身の生っ粋の職業軍人であったが、威張ったところなど全くなく、神様に対しては敬けん、人に対しては謙遜であった。

私たち四人の者は、相前後して前田教会の門を叩き、求道生活を始めた。礼拝は勿論、各集会にも休まず出席した。教会での水曜日と土曜日の会堂掃除は実に楽しみであった。私たちは、喜びと感謝にあふれて奉仕に励んだ。終った後、牧師館で夕食のふるまいにあずかるのが常であった。先生を囲んで一同、霊感賦二十六番「今に至るこそ主の恵みなれ」を手を打って讃美し、心からなる感謝の祈りを捧げて食事を頂いたのであった。

昭和二十六年十月二十二日の早朝は、私たちの待ち望んでいた受洗の時であった。伊規須太郎兄、東俊郎兄、山下忠良兄、橋井政敏兄、福岡兄、高木敏夫。女性は、東泰子姉（伊規須）、藤本英子姉（畠山）、広瀬みさお姉（池田）の計九人であった。場所は、大蔵川上流であった。一同「わが君イエスよ罪の身は」を心から讃美し、先生のみ言葉による短いすすめがあった。私は一番に水の中に入るつもりで前にいたが、伊規須兄がサッと私の横をすりぬけて水に入った。私はしてやられたと思った。流石歴戦のつわ者である。二番高木と続き、順次聖霊の名によって洗礼をさずけられ水から上がった。私は感謝と感激にあふれ、皆さんと共に神様を讃美した。

この日の午後は、牧師館において私たち受洗者のために、感謝会を催して下さった。先生が一同のため感謝の祈りを捧げられた。その後、各自愛歌を歌うように言われた。皆さんそれぞれ得意の愛歌を歌われた。いよいよ私の順番である、私は生まれ

ながらの音痴である上に、音楽教育など全く受けていない人間であった。だから今まで自分で歌うこともなく、まして人様の前で歌ったことはなかった。しかし、至上命令である、私はうろ覚えの「静けき祈りのときはいと楽し」を歌い出した。先生はじめ皆さんも同情して一緒に歌い助けて下さった。

その晩は、嬉しくて嬉しくて、感謝で感謝で眠られず、一晩中泣き明かした。朝になったら、枕は涙でびしょぬれであった。

私は受洗後、以前にも増して渇きを与えられ、一回でも多く教会に近づきたいと切に祈り求めた。それには牧師館に住まわして頂くが一番だと決心し、折りを見はからってこの事を先生に願い出た。当時誠ちゃんは重い病気にかかっていて先生ご夫妻は大変な中であられた。そのような状態にもかかわらず、私のたっての願いを聞き入れて下さったのである。私は早速、当時住んでいた八幡製鉄所の東浜寮を引き払い、牧師館へ移り住まわして頂いた。十一月十二日であった。

私の牧師館での生活は、朝五時に起床し、大火鉢や七輪にコークスや豆炭をうちわであおぎながら火をおこし、煙が出なくなった頃、六時からの早天祈禱会に備えて会堂に運ぶのが日課であった。当時教会には暖房の設備がなく、大火鉢や七輪で暖をとっていたのである。この大火鉢は、榎本先生ご夫妻のご結婚の祝いに、仲人をつとめられた河本ご夫妻から贈られた思い出の品であるとうかがった。この集会は、冬は会堂に座布団を敷いて、そこに座って行われた。参加者は、河本ご夫妻をはじめ八人から十人ぐらいであった。

朝の集会が終わると、牧師館の板張りをふき掃除し、食事を頂き、会社に出勤した。

私は牧師館での生活で、全部の集会に出席させて頂き、恵みに恵みを、信仰に信仰を増し加えられた。さらに、先生ご夫妻の私生活をつぶさに拝見し、その一つ一つを心にとめて教えられることが多かった。その中で私が特に感じたのは、先生の信仰と日常生活の在り方であった。前にもふれたように、当時誠ちゃんは小児結核のため重態であった。その看病だけで大変であった。夜も看病のため眠れぬことが多かったのである。加えて家庭の雑事が次々とあった。さらに、礼拝、伝道集会、祈禱会、週五日の早天祈禱会の司会と説教を、先生一人でなされた。私は不思議に思って先生に注目していた。

先生はあれだけの連続御用を余裕しゃくしゃくとやっておられるが、一体そのための準備はいつしていらっしゃるのだろうか、ということだった。私は四ケ月間の牧師館生活の中で、先生が

説教準備している姿を一回も見かけなかった。先生の一日は実に多忙であった。先生のその秘密は後でわかった。

それは、先生が聖霊と信仰に満たされた神の器であったからである。先生は忙しい雑事をしながら、その中で主と交わり、語ることを教えられていたのである。講壇に立ってからも絶えず主に耳を傾け、教えられながら語るとも言われた。

だからこそ、人の魂を生かす力強い御用が出来たのであろう。先生は、私たち初信の者によく言われた。「先ず聖霊に満たされなさい。聖霊に満たされることは、牧師、伝道師ばかりではなく、信者もそうです。聖霊に満たされていなかったら本当の意味で神様に信頼することも、従うことも出来ません」と。次に「み霊の導きに従いなさい」。これは先生ご自身が実験体得された奥義をそのまま私たちに伝えて下さったのである。

次は会堂増築のことにふれたい。神様は、先生はじめ一同の祈りにこたえて渇ける魂を次々と送って下さり、礼拝の時いっぱいになった。増築のためにも祈り続けてこられた先生の提案で、会堂増築が始められた。その内容は、会堂の左側にもう一列椅子を並べられるようにすることだった。三週間ぐらいかかっただろうか、昭和三十三年五月二十一日に完成した。それに要した費用は、各人が恵みに感じ、匿名で捧げられたものを用いた。そして神様の祝福により満たされた。

この増築期間の雑然とした中で、同信の福岡兄の結婚式が行われたのが印象的であった。

前田教会は増築したら、神様が祈りにこたえ東から西から、又は遠方から、求める魂を送って下さり、数年後には会堂が狭くなった。このため今度は、会堂右側に八畳敷ぐらいの母子室を建て増した。さらに数年後には、会堂の後方、即ち玄関側を拡張した。それまで教会にトイレがなく、牧師館と併用していて不便を感じていたが、この機会に玄関を入って右側に造られた。また、古い靴箱が会堂の入口に置かれていたのを撤去し、玄関正面にたてつけの靴箱が設置された。一同大いに喜び感謝した。

終わりに忘れられない思い出は、今は主のみ許にある、河本小太郎長老とカツ夫人のことである。ご夫妻は、どんなに忙しい時でも、礼拝はじめ各集会に必ず出席された。いつも会堂右列の一番前に座られた。河本家は、漬物の製造、卸し業を手広く行っておられ、全国漬物組合の副組合長をはじめ、沢山の肩書きを持っておられた。従って大変お忙しい毎日であったが、すべての事において〝神第一〟の生涯を貫き通された。またご夫妻は、終始一貫して榎本先生を神から立てられた器として敬い、礼儀を尽くされた。そして、先生の伝道を陰に、日向に助け、教会の乏しきを補って下さった。

河本ご夫妻の信仰の歩みは、私の模範であった。私もあのようになりたいと思い、私なりに主にお従いしてこんにちに至った。あれから三十七年の歳月が流れ、今や私も当時の河本さんと同じ年齢となった。この地上での残された日々を、神第一の生活をすると共に、このような素晴らしい身分、生涯に導き入れて下さった神様と、イエス様に心からなる感謝と讃美を捧げたいと切に願うものである。

「わが魂よ、主をほめよ、わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。」（詩篇一〇三篇一節）

昭和六十三年七月十四日脱稿

わたしが教会に導かれた当時

野　村　美恵子

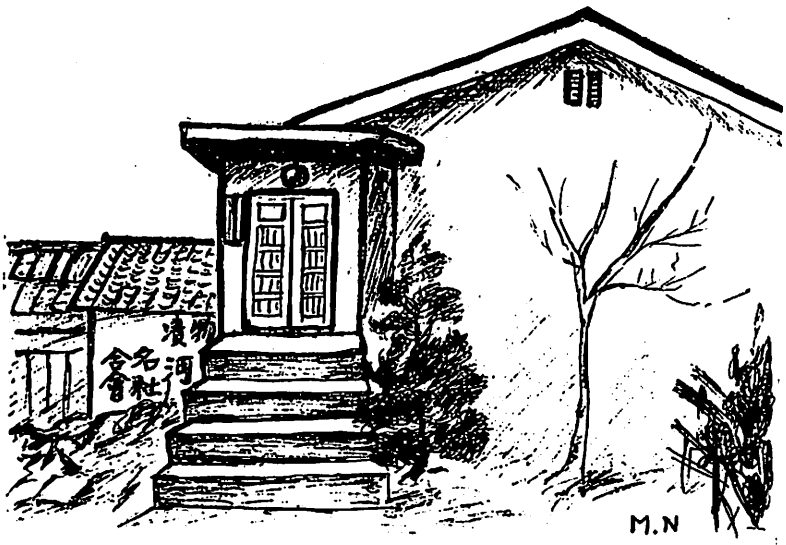
昭和二十五年八月、私が教会に導かれた時の事を思い出そうとしましたが、こんなにも記憶が消えているとは思いませんでした。当時の写真を見ながら、少しずつ思い浮かべさせて頂くひと時を与えられて感謝しています。あの方、この方を今更のように懐かしく思います。

二十五年と言えば私たちが教会に行くために西鉄に乗り、中央町で乗りかえて行ったものです。まだまだ乏しい時代でした。教会堂玄関の前には、先生がよくお話しされる「汚れた顔の天使」のお宅（防空壕）がありました。周囲もまだ荒地だったと思います。夜は西門前電停までは暗くて怖い感じでした。私はいつも一番後の壁際の椅子に恥ずかしく掛けてお話を聞きました。まだ何もわからなくて、讃美歌が楽しみでした。夜の集会にはよく奥様がオルガンを弾かれました。時々、主人が和音の伴奏でブーブーと弾いていたのを思い出します。

写真を見ながら、時代が移り変わったのを感じつつ、当時の教会を画いてみましたが、二十五年は玄関脇の樹はなかったと思います。右側の方も柵だけだったようです。間もなく隣に家

が建てられ、周囲も変わりましたが、今立派な教会が与えられ、子供達、孫達にと移って行く事を思いながら、何と言う神様のお恵みでしょうか。私は教会に来た時の事を書いて下さいと先生が言って下さらなかったら、この大きな恵みをぼんやり見過ごしてしまうところでした。書いていくうちに、三十八年間、前田教会と共に歩ませて頂いたこの忘れてはならない高く深い、言い尽くす事の出来ない神様のみ恵をも一度新しく確認させて頂いて感謝しました。

「主の恵み深きことを味わい知れ」



私が前田教会に来た頃

長尾　千枝子

私が八幡に参りましたのは、四十八年余り前のことです。

その時初めて、榎本先生の伝道集会に参加させて頂きましたが、先生はハカマ姿で、毅然と説教される姿を今だに忘れることはできません。お聞きしているうちに、私が進んで行く道はこれより他はないのだと思いました。また、百合子を始め、河本さんの御家族、それは私にとりましてまだ見たこともない別世界の方のように思えました。

その頃、何もわからない私は、少々風当りの激しい中にあって「いまだ見ぬ誠の道を信じて」という御言を信じて一生懸命参りました。

河本の今の大将がまだ一年生になるかならない頃のこと、私が廊下を拭いていると、千枝子さんと言って私に手をかけ、今にも馬乗りになって一緒に遊びたいというような感じで、その時の信生さんの姿が今でも忘れられません。そうしたら奥さんから大変叱られ、それから二度とそのようなことはありませんでした。

今日まで神様を信じて、ただ「忍耐」この言葉しか私にはあ

りませんでした。今、神様を仰ぎ見て、お祈りできる身分と変えて頂きましたことを、数十年を顧て、ただ感謝でございます。

前田教会の印象

H・T

私が前田教会に寄せて頂いた時、まず感じたことは、皆様が深い交わりの中にあり、「神様が」「神様が」という言葉が絶えず言い交わされていることでした。

教会員の交わりで、主が絶えずほめたたえられることは、当然と言えば当然のことですが、主がなかだちとなられない交わりの中には、神様への讃美・感謝の言葉は出ないのではないかと思います。前田教会が、主の祝福の中に置いて頂いているのを感じました。

この教会に、更に豊かに聖霊が注がれるよう、主が更に栄光を表わしてくださいますよう、祈っております。

教会へ導かれて

廣田　千穂子

いつだったのか、もう忘れる程前のことですが。

「このことが神様の御旨かどうか祈っていきましょう」と廣田は言い、神様を知らない私はこれはどういう事だろう。結婚という大事なことを神様に祈って決めるなんて……両親に相談するとか、上司に相談するというのならわかるけれど、本当に変わった人だなあ、と思いました。

神様といえば、氏神様とか祖母が棚の上に榊を供えて、ポンポンと手を打っていたものくらいしかの知識のない私は、祈る、そして返事がもらえる神様ってどんな方なんだろう。これは教会に行かなければわからないなあ、と近くの鍛冶町教会へ行きました。扉はぴったりしまっていて、どこからどのように入ってよいかわからずまごまごしていましたら、「御用ですか」と年配の婦人から声をかけられ、「この教会を訪ねてきたのですが」と申しますと、「今日は集会はありませんし、牧師も出かけています。御心ならばあなたは又訪ねてこられるでしょう」と返事があって、御心ってどういうことなのだろうとますますわからなくなってきました。

鍛冶町教会で求道しておりますうち、廣田から前田教会で結婚式をあげて頂くよう榎本先生にお願いに行こうと申しますので、その年の三月か四月頃勤務を終えて牧師館に始めて参りました。ちょうどお夕飯時だったと思うのですが（和義先生が幼い頃の牧師館の様子をお話になりますが、お食事時に伺って御迷惑をおかけしたことと思います）どうぞどうぞと奥の茶の間に通されて、榎本先生に私を紹介し用件を申しました。先生は「この結婚を神様が許して下さるよう祈っていきましょう。聖書をしっかり読んでまず神の国と神の義を求めよ、そうすればすべてのものをそえて与えられるとあります」と言われ、キリストを信じる者となるようすすめられました。

秋には結婚できればいいなあ、などと自分の計画で決めようとしていましたが、神様はまだその時でないとなさいました。その年の五月に廣田は病に倒れ、二年間の療養生活を送ることになり、あまり突然の出来事でまるで私は悲劇のヒーローになったように感じたものです。しかし、それもこれも神様の御計画だったのでしょう。その二年間しっかり神様に近づけられ、聖書を読み、教会生活を守って、洗礼を受けさせて頂きました。

「前田教会には敷居はありませんから、敷居が高くて教会へはどうもと言わないでどんどん来て下さい」と榎本先生はよくおっしゃっていました。その敷居のない会堂にベンチが両方に五、六列程並び、中央に白布が敷かれ、神様の前へ並んで進み結婚式をあげさせて頂きました。

今思えば榎本先生はじめ教会の皆さんの厚いお祈りと御奉仕のあったことを心より感謝しております。

「私の歩み」

水村静江

私が主と共に歩ませて頂きましたのは、十八才の終わりの頃だと思います。戦後、熊本の疎開先から八幡に帰り、一年余りたって、池田姉（旧姓広瀬操）と今の八幡西区の方に働くことになり、電車通勤をしました。前田町を通るたびに、池田姉と「あの建物はなんだろうね、普通の家でもないし、めずらしい建物ね」と話しておりました。何も知らなかったとは言え、その時から神様は私たちをとらえていらっしゃったと思います。

やがて、その建物が私の心のよりどころとなったのです。その後池田姉が、あの建物は教会だと教えてくれ、又、教会に行き、内容を私に教えてくれました。教会では共に兄弟姉妹と呼ぶこと、讃美歌が美しい声で歌われているよ、と色々と話してくれ、今では教会に行く事が喜びに変わったと話してくれましたが、私にすれば聞くにも初めてな事ばかりで、それ以上に彼女の真剣に話す気持に動かされました。しかし、いざ教会へさそわれると、私のような者が行ってもいいのだろうかと考えたり、逆に胸をときめかした事を思い出します。やはり何かを求めていたのでしょうか。

当時は信仰ということは思った事も考えた事もありませんでした。その様な私が、水曜日の夕拝に何回か出席することにより、礼拝にも行って見たいと思うようになりました。

昭和二十八年に結婚しましたが、その式の前日に教会では私のためにお祈りをして下さる事になっていましたが、まだ信仰の薄い私は、現実にとらわれ教会に行けませんでした。その後、教会では先生や信者の方々が私の来るのを待って祈っていたそうです。後で聞き本当に神様にすまない事をしたと思いました。私が神様にお詫びする事は教会に行く事が神様に対する一番のお詫びである事を心に決めました。

その様にして、私はだんだんと主にとらわれ人になりました。三人の子供が与えられ、三人目は待望の男の子が生まれ、父や主人も大喜びでした。名前は榎本牧師から祈って光義と名付けて頂きました。千恵子、恵子の結婚、光義の就職と祈りに答えて頂き、素晴らしい道が与えられました。親の気持として一生の仕事を大切にし、自分の生活、家庭をもって励んでもらいたいと思っていました。しかし、二年目に突然、献身すると宣言しました。私達夫婦はびっくり致しましたが、主人は何も言わず、「おまえが選んだ道であるなら挫折をしないように」の一言でした。

私も神様に仕えるとするならば何も言えませんでした。正直

に言って、本当にさびしくて涙が出てたまりませんでした。道理はわかっていますが、現実に手許から去って行った事は、主人は勿論私も後で止めるべきではなかったかなどと悩みました。しかし、光義は神様の奥義を知っていきました。親であれ、子であれ、神様によりたのんで行く者に何が言えるでしょうか。私はこのことを通して、人間が考えや計画を立てても、ただ主の御旨がなることを教えられました。

今は神学校で訓練を受けておりますが、神様が大きく成長させて下さる事を信じ、祈って行きたいと思います。

この様な小さな者の家庭を、榎本先生を始め皆様の祈りに支えられ守られてきた事を感謝致します。一歩一歩信仰を持って行きたいと思います。

幼い日に

河本信生

母の胎内にいる時から教会の空気を吸っていた、とおっしゃる和義先生。ザカリヤの子、バプテスマのヨハネのようですね。マリヤの挨拶を聞いて胎内でおどったという……。

朝目醒めると、霊感賦や讃美歌の歌声が耳に入ってくる。

夜、ウトウト眠り込む時にも聞こえてくる。

早天祈禱会、伝道集会、祈禱会が、廊下づたいにすぐ近くで開かれているからです。昭和二十年八月の空襲によって焼失するまで、前田伝道館の集会が、自宅の棟続きどころか廊下続きで行われていて、小学校、当時は国民学校といいましたが、その一年に入学する前から、私はそのような環境の下で過ごしておりました。

榎本先生の讃美なさるあの大きな歌声、耳になじんだメロディーの数々、それが廊下のドア越しに流れてくる。

字を覚えるより早くから耳から入った金言、子ども讃美歌。

「カミワレラノミカタナレバ、タレカワレラニ、テキセンヤ」（ローマ人への手紙八・三十一）

榎本先生が日曜学校の校長先生で、分級なし、オール一クラ

スの教師もなさっていました。しゃれたハンチング、そして、なぜかゲートル巻きスタイルの先生に引率されたハイキング。にぎやかで楽しく、わけてもプレゼントがうれしかったクリスマス祝賀会。全部、榎本先生。

時が過ぎ、先生が八幡に遣わされておよそ五年目に八幡大空襲にあい、一切合財焼野原となってしまって、続いて終戦。

信者さんはバラバラになって各地に散り、先生ご一家も百合子先生の五島のご実家へ移られました。五島で一年余？お過ごしになったのち、小倉市到津の水も出ないような山の上で、しばらく不自由な単身生活を送られつつ、主の御用に励まれました。先生にとって激動の青年期であったと思います。

焼あとの八幡にお戻りになってからも、食糧難のため買出しにご苦労なさった。幼いお子さん方のお世話、病弱であられた百合子先生をいたわっての家事万般に寧日なく、そんな状態の中で、二人の嬰児を続いて天国に召された悲嘆、葛藤、苦しみ。

伝道を続けられる先生のもとに求道の人々が来り、また去って行く。望みの持てない日々が果てしなく続くかに思え、私の目には、すさまじい苦難の道を歩んでおられるように見えました。しかし先生は、約束のものを望み見る喜びの日々でした、とおっしゃるのです。

私にとっての教会生活は、エノモト・リサブロウという方の、ひたむきで真摯な生きざまとオーバーラップいたします。

このような環境の下に、幼少年期を送ることができたことは、はかり知れないお恵みです。感謝です。

私個人の求道、回心は、それからずっと後日のことになりますけれども、幼い頃から私を、道筋をととのえて待っていて下さった、神様のご計画の深さを、そこに見せて頂くからです。

さびしさも、つーらさも、かーなしさも、なんでしょう。
エス様はわーたしの、ちーからです、しーろです。

（当時の日曜学校のうた）

奇跡の神の恵み

野村末義

「我らの尚ほろびざるはエホバの仁愛によりその憐みの尽きざるによる。これは朝毎に新なり、汝の誠実は大いなるかな」
―エレミヤ哀歌三章二十二節―二十三節（文語訳）―

昭和七年一月、福岡浜町伝道館の新年聖会が終わった直後に、初めて教会に導かれてから、今日までの生涯をかえりみて、実

に五十六年間、よくもこんな小さい弱い者が、戦中戦後を通り、きびしい社会状況の中を倒れる事もなく生きて来られたものだと不思議に思っています。学生時代の十九才の冬でしたが、風邪をこじらせて学業半ばで病床につき、段々と永引き、結果は胸を悪くして療養生活を強いられ、遂に一年後には胸部大手術を九州大学病院の後藤外科で受けました。九州では二人目というテスト的な大手術でしたが、幸いにして手術は成功して生命を与えられて助かりました。然しその毎日の生涯は、不安と恐れでした。一日として安心しておれないで、人からも捨てられてしまい、行先に希望がなくただ仕方もなく暗黒の生涯でした。その行詰まっていた折、一婦人を通して浜町の伝道館に導かれ、キリストにお目にかかり救に与らせて頂きました。時に満二十一才の春でした。それから半世紀以上も生かされて来ました。神様はその憐みと慈愛とを、主イエス様の十字架の故にこんな罪人の首を、又病みほうけた者を、お忘れにならず、捨てる事もなさらずに、その魂の救いだけでなく弱い肉体も強め新しく造り変えて（一時は重労働に就いた事もありました）、ここまで主のみ手に支えられて来ました。

「人は何者なので、これをみ心に止められるのですか、人の子は何者なので、これを顧みられるのですか」（詩篇八・四）

実に神の御慈愛により心にとめられ顧みて頂いたのである事を感謝せずにはおられません。ダビデの如くに主を讃美するのみでございます。

現在は、満七十七才と四ケ月と相成りまして皆様から喜寿の祝をして頂いて、こんなに主の祝福にあずかるとは本当にこの上ない幸福者であります。そして、孫も十人となり、総勢二十名を数える大家族となりました。

創世記三十二章にあるヤコブの様に、彼が故郷を出て兄エサウの顔を恐れて伯父ラバンの所にのがれて後、二十年間働いて主の祝福を受け故国に帰る時に、神様に祈って……。

「父アブラハムの神、父イサクの神よ、かつてわたしに『おまえの国へ帰り、おまえの親族に行け。わたしはおまえを恵もう』と言われた主よ、あなたのしもべに施されたすべての恵みとまことを、わたしは受けるに足りない者です。わたしは、杖の他何も持たないでこのヨルダンを渡りましたが、今は二つの組にもなりました……」と言っておりますが、今日のこの小さい私もこのヤコブと同じ感じを強く覚えています。

終戦後昭和二十一年に、空襲で持物すべてを失って、全く無一物となり、着のみ着のままで不思議な神のお導きにより北九州に来ましたが、奇しくも、榎本先生の牧会される八幡前田教会に帰らせて頂いた事は、私にとって大きな恵みでありました。

一度、主によって救われた者が、イスラエルの民のように主

にそむいて離れようとしても、高い代価が払われた主の愛は終わりまで変わる事はありませんでした。失われた羊を尋ね出し、みもとに招き入れて下さって、今日までになりました。

実に虫に等しい者が、かかる恵みを頂いて霊も肉も共にここまで来させて下さった事は、主の奇跡のみわざと言う外にはありません。パウロがコリントの教会への手紙の中で、

「主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』それだからキリストの力がわたしに宿るように喜んで自分の弱さを誇ろう。……。わたしが弱い時にこそ私は強いからである」と言っておりますが、今、しみじみと味わっている聖言です。

これからも、いよいよこの大いなる神の愛と恵みに感謝して、もう一度残された日々を感恩讃美で、主のみもとに帰る迄、主のみ手にすがって進んで行く事を念願しております。

◎　罪多きこの身をさえも捨てまさず
　　主の血に許さるしあわせな者。

◎　生かされて思いもよらぬ半世紀
　　強きみ腕にいだかれて。

◎　十字架の貴き恵みたたえつつ
　　従い行かん　今日のひとあし。

◎　ああ十字架　ほめよたたえよ主の恵み
　　歌えどつきせぬ　神の愛

（小羊山人）

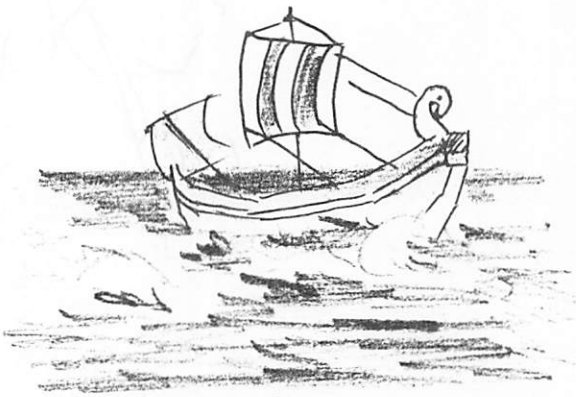
―昭和六十三年五月―

エステル会の研修旅行に参加して

筑山　寿々子

五月二十四日、一泊二日の雲仙旅行を導いて下さいました主に心から感謝いたします。長い間祈って参りました二年ぶりのエステル会の旅行でした。参加させて頂けるかどうか健康の事もあり祈って参りました。祈りにこたえられ参加させて頂く事になりました。天候にも恵まれ、全員二十名、野村先生が風邪気味で不参加とか残念でした。この度は貸切バスで行く事になり、黒崎バスセンターから乗せて頂きました。思いがけなく榎本百合子先生と同席させて頂きました。まず感謝いたしました。普段集会の際はゆっくりとお話する機会もなく、この度いろんなお話をさせて頂きほんとうにお恵みだった事を心から感謝いたします。ありがとうございました。

バスは高速を経て予定通り長洲のフェリー駅へと参りました。まずお天気に恵まれました事、新緑の一番よい季節でした事、目を見張るばかりの山々、そしてフェリーの船中静かな有明海、あちこちに見える景色を榎本先生の双眼鏡を貸して頂きより鮮明に見ることができました。船中四十五分で多比良港に着き、私の中学校時代一年程住んだ事のある島原での昼食だと聞き懐かしい思いでした。姫松屋の具雑煮、うわさに聞いて居りました。ほんとうにいろんなお野菜や蒲鉾、ちくわ、鶏肉と数えきれない程多彩な具が入って素朴な味は又格別でした。その後、「銀水」を尋ねて参りました。昔風な素朴な構え、湧き出る水にさらして小さな可愛いいだんごに蜜をかけて頂く寒ざらし、ごまぜんざいをも味あわせて頂き、又ところてんも頂きおいしかった事。八十才位かと思われるおばあさんがお一人でなさってるとか、それからバスは約三十分程山を登り仁田峠へと参りました。「みやま霧島」が一面に咲きみだれ見事な風景。ロープウェイで妙見岳の展望台に参りました。そのロープウェイの中から見おろす谷間の景色は又格別でした。この素晴らしい自然を作って下さった神様に感謝せずにはいられませんでした。



雲仙宮崎旅館に着きましたのは四時半頃でしたでしょうか。

五時からの集会に導かれ「わたしは常に主をほめまつる、そのさんびはわたしの口に絶えない」（詩篇三四・一）心から主を讃美し感謝しました。温泉のお風呂を頂き夕食、沢山の心のこもったお料理の数々「数えておけばよかった」とか同じ主をあがめ主を信じた人達の旅行は何ものにもかえがたい思いがいたします。島原市内に住んでいる妹が尋ねて来ると申して居りましたところ、丁度夜八時からの集会が始まったばかりの時に尋ねて来て、集会に導いて下さった神様に感謝いたしました。お勤めしていて高一の娘と二人暮らしですので、時間を知らせても思う通りにならないものを、丁度よい時間に導かれた事神様の導きでなくて何でしょう。

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことかよく考えてみなさい。わたしたちはすでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである」（ヨハネ第一―三・一）ほんとうに神様からどんなに大きな愛を賜わっているか考えてみる時に、感謝で一杯でした。妹としばらくの時交わりの時が与えられ、又榎本先生にもお祈りして頂きほんとうに感謝でした。旅館の女将さんの心づくしの枕上の草花と言葉、人柄がしのばれる思いがしました。朝までぐっすりと休む事が出来、朝の集会では、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい」（ヨハネ十五・九）

この度の研修旅行で教えられたのは、大きな愛を賜わったことをよく考えてみなさい、又神様を信じ神の子である事を自覚し、神様の愛の中にいなさいと教えられました。

二十五日九時宮崎旅館を出発、小浜を経て千々石の展望台に立ち寄り、彼杵嬉野を経て武雄の慧州園で昼食（洋食）を頂き、ちょっとリッチな気分になり、展示館を経て、きれいに整えられた日本庭園裏の小高い山と茶畑を借景に作られた自然とお庭との調和、今だに頭の中に描かれています。九州陶磁文化館で有田柿右ェ門作品の数々をたっぷりと見せて頂き、柿右ェ門宅にては普段見る事の出来ない高価な品々を拝見させて頂きました。時にかなって疲れをいやすお茶を頂き、何から何まで行き届いたお心づかいありがとうございました。お祈り頂きました榎本先生はじめ御世話下さいました姉妹方や楽しい旅行にして下さいました皆様に心から感謝いたします。旅行記をとのおさそいに、つたない文章をしたためさせて頂きました。お許し下さい。心から主を崇めさせて頂きます。お祈り頂きありがとうございました。

「みんぱく」

伊規須　太郎

【みんぱくをご存じですか？】

◆民族博物館の略称です。　◆国立の研究博物館です。

◆大阪の万国博覧会場跡地（吹田市、万博公園）にあります。

【民族学とは】

◆世界諸民族の文化を比較して、人類の文化を理解しようとする学問です。文化人類学とほぼ同じ意味です。

①世界の諸民族の生き方はどのように違うか

②またどのような共通点があるか

③なぜそのように違って来たか……を研究する学問です。

【わたしの訪問】

◆昭和六十二年五月二十四日（日）深夜、夜行列車で大阪へ

◆二十五日（月）午前、U館長と面談　◆同日午後および二十六日（火）館内見学取材　◆二十六日（火）夜、帰宅

【訪問の目的は三つ】

一、私と若干接触のあるU館長が、昨六十一年に珍しい眼病にかかりました。視神経の病気のため、視力が極端に落ちて回復もはかばかしくない。その闘病記を読み、精神的に苦しんでいることを知って、（視力障害者用の特大活字の）旧約聖書「ヨブ記」および「伝道の書」を贈り、訪問して短時間面談した訳です。（※面談内容は戸畑教会発行「私の使徒行伝(5)」二一二―二一七ページ参照）

二、民族学は結局「人間とは何か」を探究する学問と言えます。多彩に見える世界の諸民族も、みな神様の手の中にあるものですから、詩篇一〇四篇あるいは使徒行伝一七章を検証するつもりで見学に行きました。

三、民族学研究用ファイル資料「ＨＲＡＦ」について調査するため。

【ご案内】

◆世界各地の民族資料（もの）を通して、ある種の世界一周をすることができます。

◆ビデオによって諸民族の生活に触れることができます。数十の小型個人映画館（？）があって、多くのメニューの中からボタン一つで呼び出すことができます。

◆世界の民族音楽、各言語を聞くことのできる、個人用の施設があります。

◆展示場は

①オセアニア　②アメリカ　③ヨーロッパ

④アフリカ　⑤西アジア　⑥東南アジア

⑦中央・北アジア
⑧東アジア
⑨地域を限定しない「言語」「音楽」コーナー

に分かれています。簡単に一巡するだけで二、三時間かかります。ビデオ資料などを視聴しようと思えば、丸一日かけるのが良いと思います。

【参考事項】

◆開館時間　一〇時～一七時（水曜休館）（水曜日が祝日の場合は翌日が休館）

◆入館料　個人三〇〇円

◆足の便　（最寄り駅）①北大阪急行線、千里中央駅
②阪急千里線、阪急山田駅
③東海道本線、茨木駅
④阪急京都線、茨木市駅
（タクシー）民博正門まで入ります。

◆宿泊　ごく近くには少ないようです。私の調査した二例
①JR茨木駅より五百米　ビジネスホテル春日
☎〇七二六（二五）一六六七
②阪急千里線、南千里駅前ホテルサンルート
☎〇六（八三四）一九一三

◆手荷物　正面ホール左奥に無料コインロッカーがあります。

◆写真撮影　いずれの展示物もストロボ撮影が許されています。

◆食事　レストランがあります。その他の場所では飲食禁止。

◆売店　関連資料、書籍類、展示物のレプリカ（複製品）などを多数展示販売しています。月刊機関誌「みんぱく」、季刊「民族学」などのバックナンバーも揃っています。「民博友の会」の入会手続きなどもできます。

◆案内書　「国立民族学博物館展示案内」（一二〇〇円）を予め読んでから見学されるのが良いと思います。

【国立民族学博物館友の会について】

◆普通会員　年会費　一〇〇〇〇円

◆同右の特典　①家庭学術雑誌・季刊「民族学」が年に四冊送付されます。
②同館の広報誌「月刊みんぱく」が年に十二

冊送付されます。

③「友の会ニュース」（隔月刊）が年に六部送付されます。

④無料で入館できます。

⑤売店で会員割引が受けられます。

◆申し込み先

一、〒五六五　大阪府吹田市千里万博公園一の一
千里文化財団
「国立民族学博物館友の会」係
☎〇六（八七七）八八九三

または

二、〒五六五　大阪府吹田市千里万博公園一〇の一
国立民族学博物館内
ミュージアム・ショップ
（直通）☎〇六（八七六）三一一二
「国立民族学博物館」
（大代表）☎〇六（八七六）二一五一

以上　一九八七・六・一三記

信頼にお答え下さる

櫨木　スミ子

聖名を讃美致します。

昭和六十二年一月五日、産業医大病院に入院致しました。胆管に胆石がいっぱいつまっている故に、胆ノウと胆管を取り除く手術を受けることになりました。二月五日手術日でした。愛する兄弟姉妹の暖かいお祈りに支えられて、主の愛の御手の中で、お医者様の知恵心ではなくて、主よ、あなた様の御心のままに手術を行って下さいと、お祈り致していました。「みよ、神はわれらの救い。私は信頼して、恐れることはない」「心しずかに私はいこう。神よ、あなたの平和のうちに」とのお教えを紙に書いて、手の中に握りしめましたところが、心が安らかになりました。

高木敏夫先生と子供達が、心配してかけつけてくれました。本日は木曜会です。教会でみんなでお祈りします。貴女は、主が共に居て見守って下さいます。元気を出して、主にお任せ致しましょうとお祈りして下さいました。

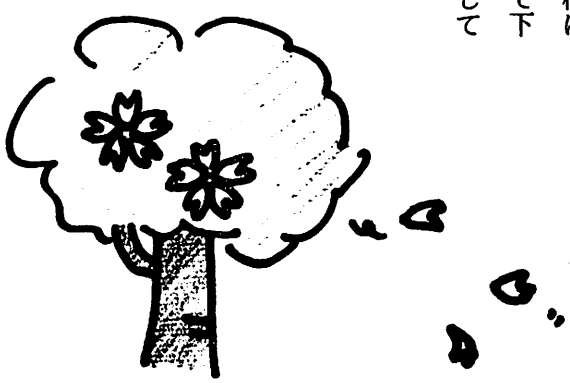
手術は八時間。その長い間、高木先生は子供達を励まして、心を合わせて祈りましょうと祈り続けて下さいました。私は教

会に行きたいと思いながら、手術場に運ばれました。ところが私の心は教会に行って居ました。心安らかな讃美歌は流れて、牧師先生のお説教も聞こえる。美しい美しい教会。お説教も終わった。さあ、帰りましょうと思った時、お腹が痛い痛い。お医者さんが無事に終わりましたよと声をかけて下さいました。左脇腹の下から、横に右脇の下の所、二十五㎝位切りさかれ、腹の中に大小十三本位の管が差し込まれていました。痛い痛い。苦しい。身動きできない。主よ、お助け下さいーと叫びました。涙がポロポロ。主の十字架が目前に見えました。

「あなたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」（ヨハネ十四・一）

私の罪のために、主を十字架に……。平気な顔をしていたおろか者の私に、神様は私を見捨てる事もなさらず、やさしく愛の御手を差しのべて、「恐れてはならない。わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない。わたしはあなたの神である」御言葉をもって話しかけて下さいました。我が身を切られて、初めて目が開かれ、自分の罪の深さを知る事ができて感謝致しました。主よ、お許し下さいと心の奥底より祈る事ができる様になりました。聖書を読む力も、開く事もできない、聖書が開けない、なさけないが何んとかできないかと思っている時に、高木先生がお顔を見せて、聖書を読んで下さいました。とても嬉しいひと時を、主は与えて下さいました。苦しくて、悲しくて、泣いている時も、私と共に涙を流して下さいました。御言葉を教えて、勇気を与えて下さいます。一生懸命に手をのべて、聖書にさわると必ず、私に任せなさいと話しながら読んで下さいます。主が私と共に居て下さるのか、高木先生なのか、ボーッとしている頭ではわかりませんでした。

私は身動きも止められ、ベッドの中で何もできないでも、主に祈る事、笑顔を忘れない事、廻りの人に感謝する事はできると思ってみても、信仰のうすき者故に、それさえもできません。そんな私なのに、常にイエス様は、愛の手を差しのべて守り導いて下さいました。今までお聞き致していた御教えが、牧師先生のお説教のお声が、私の頭の中をぐるぐる廻って、神様の真理とその意味がわかり始めました。苦しいベッドの中で身動きできなくても、神様と主との交わりの持てる場所、今この時が、主と共にあるパラダイスなのだ



という事を知る事ができて感謝致しました。その時から、苦しさも、悲しみも、痛みも、どこかへ飛んで行きました。唯々喜びばかりになりました。文男君が来て、「あら、おばあさんが元気になっている」と喜んでくれました。

聖書を読んでいると、主治医の先生は本をのぞいて、ニッコリと笑うのです。このばあさん、こんな本がわかるのかなあーといった顔をして、私の顔を見るのです。回診の時、お医者さんが何人も来て、樋木さんは大手術だったのに、僕達に心配かけず、手もやかず、思ったより早く元気になって、こんな事初めてと思っていたら、クリスチャンだったのかーの一言がとても嬉しかった。主のお恵みと感謝致します。牧師先生、兄弟姉妹の皆様、長い間のお祈りを感謝致します。今後もどうぞよろしくお願い致します。アーメン。

ああ、感謝なるかな、エステル会研修旅行

伊規須　泰　子

◆先ずは

旅行への誘いがかかった頃……「明日では遅い」あるいは、「またにしよう」では取り返しのつかないことになるかも知れない、すべきことは示された時にすぐ……と教えられていた。二十五日（水）の集会二回（早天祈禱会と第一祈禱会）が抜けるからどうしようかと考えたが、次の機会では自分がどうなっているかわからない、そこで前記の思いを勝手に解釈して、行ける時に行かせて頂こうと祈った。そういうことで参加させて頂いた訳！よかった!!

◆備えあれば憂いなし

今回は豪華バスの旅、戸畑での集合時間は八時だった。家から五分ぐらいで集合場所に行ける、十五分前には家を出るつもりで、二十五分前にはすべて用意ができていた。そこへ「バスが来ている」と電話あり、すぐ飛び出し間に合った。戸畑、八幡、黒崎でみな乗車。……天国の祝宴も、いつでも行ける用意がないと、戸が閉められるかも知れない。心の備えありや？…

＝＝いよいよ研修隊の出発、目指すは雲仙！＝＝

◆天の住まいには、すべてが備えられている

①このバスは「天国号」とか？乗っている方々は天国の住人二十名。そのバスの装置に驚いた。お湯が出る、いつでも飲みたい時に熱いお茶が飲める。冷蔵庫があって冷菓や果物が頂ける。シートは快適、窓は広い、テレビあり（必要がないので見なかったが）、勿論マイクあり。委ねていればらくちん、らくちん、運転手さんが気を付けて運転して下さる、私はただシートに身を任せているだけでありました。……天国には快適な住まいが用意されている。いつでもいらっしゃいと……

②また、少し先の事ですが……旅館（宮崎旅館と言いまして、なかなか泊まれないらしい、半年ぐらい前に申し込んでいたとか）の部屋にも、すべてが用意されていました。歯ブラシは勿論、タオル、石鹸、それに（お風呂に入る時に）髪を覆うビニールのカバァー？まで。浴衣と寝間着は別なのです。部屋は新婚さん用とか、私共の泊まった部屋は、六畳のタタミとダブルベッドがありました。ダブルベッドの真ん中で一人で悠々と休ませて頂きました。ちなみに、昔は旅先ではなかなか眠れなかったのですが、今はお恵みで委ねることができるようになりました。感謝！

◆海は母のふところ

長洲から多比良はフェリーで、海を堪能しました。有明海の波静か、内海とはいえやはり広い。遠くの陸地をぼんやり見ながら船の航跡を見ていたら、波に包まれているような感じでした。母のふところ、父なる神様のふところにやすらうような気がしました。気持がどんどん大きくなって、世界のために祈ろう、この海をも造られた神様なら、と信仰がふくらみました。

◆霊肉の恵み

……オー、ハレルヤ（霊の糧）……

①あがないの喜び

②神の子とされた恵み、出エジプトの感激

③父（神様）⇅子（イエス様）⇅私との愛の関連

あがなわれし身のこの感激、日々叫けばんハレルヤと

……肉の恵み……

①おやつ……バスの中にて、宝袋。②二十四日昼食……「具雑煮」何とまあ、多彩な野趣あふれる味か！デザートに「寒ざらし」水の豊かな島原（日本名水百選の島原湧水群）のまろやかな味わい。③二十四日夕食……素朴で多彩なものでした。④二十五日朝食……手作り豆腐が珍しくおいしかった。⑤二十五日昼食……センチュリーホテル・エトワール（武雄）にて、

フランスもどきの御馳走（パンならず御飯がついたのには、少々驚き）。⑥おやつ……磁州窯店（？）でクリームソーダなど、バスの中で冷たい珍しい蜜柑、お茶も喉を潤してくれました。天国の祝宴は？これどころか！

◆もろもろの天は神の栄光をあらわし

……みどりの神秘……

①仁田峠にて。みやまきりしまも美しかったが、ロープウェーから見下ろして見た新緑に魅せられてしまった。濃淡で織りなすみどり、緑という表現で幾色あるのだろうか、息を飲む思いの美しさ！　これを見て神様を認めない人があるのだろうか。（神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められる）皆さん、神様を信じない訳にはいかないでしょう、と祈らずにはおられない。

②慧州園にて。翡翠の館、御船山を借景にした日本庭園、素晴らしいものですが、私にとっては広々としたお茶畑の間の段々を登って行くのに風情を感じました。お茶の木のみどり、香りが漂って来るような気持でした。

◆心づかい

前にちょっと出ましたが、宮崎旅館は素敵なお宿です。ベッドに野の草花と言葉が添えてあるのです。朝食には、自家製豆腐の説明書と今日の天気のカードが添えてありました。雲仙の四季の絵入の（荷物などに付ける）名札も頂きました。心なごみます。主のお心をなごませるよう、砕けた優しい心でいたいものです。

◆地獄めぐり

夕方、いわゆる地獄めぐりをしました。地面から硫黄がもくもくと湧き出ている、不思議な自然の風景です。キリシタン殉教の場所と立札がありました。その当時に私が立っていたならどうかと問われました。本当にどうだろう？厳粛な一瞬でした。

◆語らい

同室の方とのお話は信仰の証ばかり、この世の人たちとの交わりと何と違うことでしょう。「悩みにある時ほど主に信頼した」と、それは格別の恵み、人間の馴れは恐ろしい、悩みにあっても無くても何時でも、いつでも信頼せずにはおられないと話し合いました。

◆癒しの大浴場

大浴場は二十四時間、いつでも入れます。尽きないお湯です。

夕方と、休む前と、早朝とに入って堪能しました。飲めば便秘に良い、肌はつるつるになると言うことです。疲れは癒され、汚れは清められ、極楽？いや天国の心地でした。少しはきれいになったかしら？頬をさすってみました。硫黄ではない、主イエス様の御血潮ですべては清められるのでした。

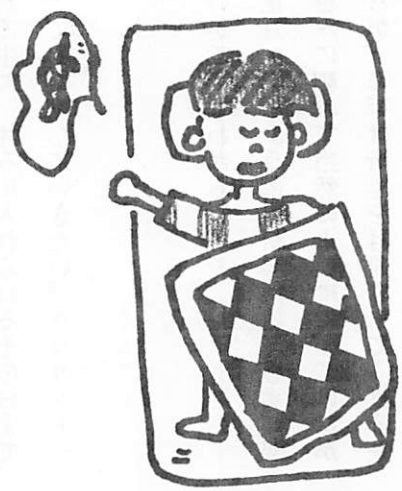
◆陶器師の手に粘土があるように

有田の九州陶磁文化館で陶磁器造りのビデオを見ました。土の採集からその精練……ずっと様々な念入りな過程があって、色付けから焼きつけと、大変な技、びっくりびっくりして引付けられました。世に出るのは焼き上げた何分の一とか、本当に驚きました。陶磁器の世界も随分幅広いものです。知識はありませんが、少し見ただけで全く驚きです。歴史、伝統、種類、などなど……陶磁器が高価な筈です。これだけ魂を込め、手をかけ、時間をかけて仕上げたものですから。神様が私（人間）を創造されたのは、もっともっとすごいわざでしょう。だからそれを捨て切れない、帰れ、帰れと待って下さっている訳です。そう考えたら胸が熱くなりました。

◆ありがとう

先ずは、戸畑教会の身でありながら、今回の研修旅行にお加えて下さったこと感謝します。

私はただ「乗りなさい」と言われてバスに乗る。「お昼ですよ」と言われて珍しい御馳走を頂く。次は次はとスケジュール通りに従って行くだけで（ただお言葉に従いさえすれば）素晴らしいお恵みにあずからせて頂けるのです。総指揮官はじめ、すべてのお膳立てして下さった幹事さん、会計さん、交わりに入れて下さった方々有難うございました。ただただ感謝致します。厚かましいけれど、またこの次もよろしく。行かないで祈って下さった方々有難うございました。



行く前には色々のことを取材しようと考えていましたが、大自然の前にうっとりと楽しんでしまいました。かくしてバス「天国号」は、皆さんを降ろして戸畑に帰り着きました。天気もよく、皆さんも元気で主に支えられた二日間でした。霊肉の糧がたっぷり備えられました。さあ、また一足一足、この世にあって主に従ってまいりましょう。本当の天国へ帰る日まで……

一九八八年五月

感謝

廣田　壽

(一) 今日あるを得て

昭和二十五年、大阪の地から九州に来て以来、三十数年の勤めを終え、昭和六十二年六月、無事退職することができた。絶えず共に在してお導き頂いた主に感謝し、常に祈りに覚えお交わり頂いた多くの方々に、心からお礼を申し上げたい。

仕事は、数名で創業した会社であっただけに、永年ひたすら打込んできた。戦後の混乱期から高度成長期を経て、全国に事業展開を図り、数百名の中堅企業に成長させて頂いた。それにつれて、八幡で十年、東京で五年、川崎へ移って二年、また八幡に帰って十三年、再度東京へ三年、最後は八幡へ帰って四年と、転勤を経験してきた。

その間、住居も小倉、東京、逗子、八幡、横浜と転々し、与えられた子供達は、長女が小倉、長男は東京、次女は逗子と、それぞれ出生地が異なる珍しいケースとなり、新しい土地への体験を重ねながら成長させて頂いた。

教会は、昭和二十三年、大阪高石教会で求道、受洗し、その後、前記のように九州へ来て、八幡前田教会から各地へ遣わされた思いである。東京の志村栄光教会、逗子教会、渋谷教会へと導かれ、礼拝を守らせて頂き、主に在って、多くの交わりを持つことができた。

入信以来四十年、様々な中を通されて来たが、その都度、神の憐みと恵みにより、信仰を与えられ、奇しくも今日あるを得ていることに唯々感謝でいっぱいである。

常に教えられているように、救われた者の身分をわきまえ、信仰の基本にかえって、「されど今日も明日も次の日も我は進み往くべし」（ルカ十三・三三）といわれる主に、休みに入れられるその日まで、喜びと祈りと感謝をもってお従いしていきたい。≪コリント一一五・一〇≫

(二) わが身はいかでか歌わざらめや

年末に暦をめくると正月が来るように、新年には、必ずご聖会が開かれるものと、恵みに馴れて当然のように考えていなかったであろうか。ところが、昨年は新年を目前にして、牧師先

生のご病気入院となり、聖会が開かれなかったのである。
教会員一同、心を合わせて、主の癒しのみ手を切に祈り、重苦しい中で迎えた新年であった。憐みに富み給う神は祈りに応え、危険な中から全く奇蹟の癒しを与えて下さった。
そうして、直ちに、再び尊いご用に当って頂けるようになったのである。言い尽くせぬ感謝であった。
今年は聖会が開かれた！　先生は健康を支えられ、お元気で三日間のご用に当って下さった。昨年のことを思うと、誠に感謝にたえないところで、皆さんと共に、この得難い時を待ち望みつつ出席させて頂いた。遠く東京、大阪から、空の便や新幹線で来られて、ホテル住いで聖会に出席された兄弟姉妹があったことも、感謝であり御名を讃美した。
主のご聖会は、聖霊のお導きにより、全体の大きな流れの中で、天地を造りこれを支配される偉大な力ある主、何でもできないことのない主、血をもって贖い共に住むと言われる主が、もう一度、私たちの身分を明らかにして下さった。
その主に信頼する時、心騒がせない平安を与えられること。わたしに呼び求めよ、と言われる主との交わりにより、自分で力まず、事ごとに主にゆだねていくこと。身も心も、立って主にかえり、キリストの内にとどまって、神のみ旨に従って生きること。を、懇ろに導いて下さったのである。
罪赦されて主の手の内にある喜びと平安、これは理解するだけでなく、日々の実生活の中で、不信仰にならぬよう、かたく主に信頼し、御言に従うようにと、繰り返し教えて頂いた。
今年一年、聖霊に導かれ、信仰もって心を主に向け、見ゆるところに動かされない、パラダイスに住まわせて頂く確信を与えられて、この大いなる恵みに感謝した。
三日目の夜、「万軍の主の熱心がこれをなされるのである」（イザヤ九・七）との御言を頂き、とどめをさされた思いであった。《霊感賦五一》

㈡　なみだも恵みにむくいがたし

体調を崩して休んでから、この度、三年ぶりに礼拝司会のご用に当らせて頂くことになった。
「神を信じまた我を信ぜよ」と言われる主は、癒しを与え、忍耐をもって今日まで見守って下さったこと（イザヤ三〇・一八）を覚えさせられ感謝した。牧師先生は、長期間祈って体調回復のチャンスを待って下さった。
司会の連絡を頂いたのが土曜日の夕方。その週は、火曜日に九大病院で検診を受け、耳下腺三回目の手術のあと、無事五年経過したことから、次からは一年おきの検診にしよう、と一応解放された日であり、金曜日には、厚生年金病院で検診、胃の

手術のあと三年になるので、これからは半年毎の検診で良いということになり、これもまた、一息ついた日であった。余りにも、そのタイミングの良さに驚くと共に、全てをご存じの主に感謝せずにはおられなかった。

翌日のご聖日は、暖冬あとの小雪のちらつく朝で、文字通り、身の引き締るのを覚え、新しい気持で司会をつとめさせて頂いた。このようなご用の蔭にも、主の執成しと多くの方の祈りのあることを思わせられた。

午後開かれた信徒会で、早速、このことを証させて頂いた。行き届いた主のみ思いに引き出されたのである。

思えば、私にとって長く、厳しい戦いの日々であった。空の鳥を見よ、野の百合は如何にして育つかを思え、と教えられながらも、見ゆるさまに過敏になり勝ちなのが、病いで経験させられるところである。しかし、これに耐え、乗り切ることができたのは、主が共にいて戦い、勝利を見せて下さったからである。（歴代志下二〇）

主に迫られる時、咽ぶものをとどめ得ず、裸の姿でみ前にひれ伏すしか、すべのない、大きな感謝であった。

《讃美歌一三八》

一年の感謝（六十二年十二月）

大口和子

六十二年度・八幡前田教会標語

一、「栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」

（Ⅱコリント・三・一八）

二、「光の中を歩くならば……御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちを潔めるのである」

（Ⅰヨハネ・一・七）

三、「あなたの信仰があなたを救ったのです」

（マタイ・九・二二）

私は、六十一年の暮れから、やがて開かれる新年聖会のために、真剣に祈って待ち望んでいました。しかし、その直前になって榎本先生の突然のご病気、そのため聖会も中止となりました。これは前田教会にとって初めてのことでした。しかし、幸いなことに、三つの標語が与えられ、私は力づけられました。

先生には、御重態の中を通られなさいましたが、「人には能わぬところなり、されど神においては然らず……」と信仰を持ち

続けられました。また、主にある兄弟姉妹の皆さんも心を一つにして、先生がこの中から全くいやされますよう祈り続けられました。神様は、その信仰と切なる祈りにこたえ給い、その願いのように先生を全くいやし強めて下さいました。「あなたの信仰があなたを救ったのです」神様は、このみ言葉を先生の上に成就して下さって、信ずる者に今も生き働いて下さることを、事実をもって私たち一同の心に刻み込んで下さいました。

私自身、信仰が生ぬるくなっていた者でしたが、「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」とのみ言葉と共に、主が私に働きかけて下さいました。まるで愛のむちで打たれたような感じでした。私は目を覚まし信仰を復活させて頂きました。

今信仰の目を開かれ、自分を見ますと、私の両眼は視力を失いましたが、触覚が与えられていることを主に感謝しつつ、聖書を隅から隅まで読むようになりました。嬉しいことには、今年は主人と二人で創世記からマラキ書まで、読み書きを交替しながら写すことができました。点字の聖書は安いので購入することはたやすいのですが、自分で読み、また書くことによって少しでもみ言葉を自分のものとすることができるのではないかと思ったからです。また、早く正しく読み書きができるための練習にもなると思い、一生懸命に書きました。主人が各巻に表紙をつけてくれましたので、私の聖書が立派にできあがりました。これは私の生涯の宝です。

最近は、聖日礼拝の時の詩篇交読も口では皆様に遅れますが、手の方はしっかりと触読できるようになりました。失明してから一番嬉しかったことは、聖書のみ言葉と讃美歌の歌詞を、隅から隅まで読むことができるようになったことでした。

神様は、耐えられないような苦しみには合わせられずに、計り知ることのできない深いご愛を注いで私共一家をお導き下さいました。その一つ一つのお恵みを覚え、心からなる感謝を神様と主イエス様に捧げずにはいられません。このような者たちを覚え下さり、今後ともご加禱下さいますよう、お願い致します。

終わりに、榎本先生ご夫妻のご健康と主の御用を全うされますようお祈り申し上げます。

雲仙研修旅行に参加して

島崎博子

一度教会の研修旅行に参加したいと思って居ましたら、此度エステル会の研修旅行に参加できて大変嬉しう御座居ました。他のバスツアーでも二、三旅行した事がありますが、教会での旅行は、旅館についてすぐ礼拝、又就寝前に、朝食前に、榎本先生から神様のみ言葉を聞かせて頂き、本当に恵みに満ちたもので御座居ました。拙い一首ですが

夕拝に朝拝ありて教会の　雲仙旅行に心満たさる

又、雲仙岳では色とりどり（薄紫、ピンク、ローズ等）のみやまきりしまが咲き匂い、又下界より涼しいせいか五月の終わりにうぐいすのか細い声が聞かれ、全く興味深く神のくすしきみわざを見る事ができました。

とりどりのみやまきりしま咲き匂う　雲仙に来てうぐいすをきく

又、旅館もとてもよいもので、お部屋も立派、お食事も全く美味しいもので、皆で舌鼓をうちました。神様に祝されて頂くものは又格別の味わいで御座居ました。

夕食後、旅館の近くの地獄めぐりを四、五人で致しましたが、足が弱い私を岩隈さんが腕を取って歩かせて頂きました。全く感謝で御座居ました。そこで一首

足弱きわれのかいなを取る友の　ぬくとさ伝う地獄めぐりの

翌日は佐賀の方に廻り、柿右衛門窯の陶器を見学致しましたが、全くその色の素晴らしさ作りの精巧さに感嘆致しました。

神様の御愛に包まれ、榎本先生はじめエステル会の皆様に暖かいお交わりを頂き本当に感謝で一杯で御座居ました。

ソ連捕囚物語（一）

高木敏夫

はじめに

昨年の秋頃であった。私はある書店に入って、棚に並んでいる本に目を通していた。やがて一冊の本に目がとまった。その本の題名は、「シベリヤ抑留よもやま物語」とあった。私は懐かしさのあまりその本を手に取り、立ち読みを始めた。この本の著者はシベリヤ、私は中央アジアと場所の違いこそあれ、その中で体験したこと、感じたことは、全くと言っていい程似ていた。私はその本を読みながら、四十年前のつらくて長かった抑留生活をまざまざと思い起こし、涙を流した。私はこの本を買って帰り、家で一気に読んだ。

私は、この本を読み終わり、「私も機会があればこのような記録を残したいものだ」と思った。ところがこの一月、礼拝後の信徒会の席上、はからずも私がソ連抑留時代のエピソードを披露したところ、榎本先生はじめ信徒の皆さんから、「それは貴重な記録だから、是非『ぶどうの木』に投稿して欲しい」と言われた。私は時機到来とばかり書く気になったのである。以来構想を練ってみたが、三年間の抑留時代の思い出はあまりに多く、到底一回きりで書き終えるものではない。そこで、何回かに分け順を追って書くことにした次第である。

敗戦までのあらまし

さて、昭和二十年頃、私が所属していた部隊は、満州国・牡丹江省・東寧県・城子溝に駐屯していた。陸軍歩兵三〇六部隊であった。私は第一大隊第二中隊に属し、階級は一等兵で、軽機関銃の射手であった。

五月になり、部隊に動員が下り、他の部隊と共に南下し、南鮮の慶尚南道の各地に駐屯した。私の属する中隊は、海岸の三千浦という土地に、小隊ごとに分散宿営した。その任務は、海岸に向ってそそり立つ岩山をダイナマイトで爆破し、くりぬき、陣地を築くことであった。やがて上陸を敢行するであろうアメリカ軍を海岸で迎撃するための作戦であった。

やがて八月を迎えた。九日は私たちにとって運命の別れ道であった。この日ソ連軍は何の予告もなく、突如として満州全域にわたって侵攻して来たのである。当時、満州駐留の関東軍の精鋭は南方の各戦線に動員され、残留の部隊には、武器さえ満足になかったのである。

八月十四日、私たちの師団に「急きょ北上し、ソ連軍を迎撃せよ」との命令が下った。軍隊という所は命令一下絶対服従で

ある。私たちの中隊も直ちに完全軍装を整え、普州の駅へと向った。昼夜兼行の強行軍であった。

普州の駅に着いたのが十五日の昼頃であったろうか、駅の広場で行軍の疲れをいやしていると、中隊長の訓示があると言う、一同整列して中隊長に注目した。中隊長は、悲壮な顔で、「日本軍は戦争に負け、全面降伏した」と告げた。晴天の霹靂とはこの事であった。一同呆然自失、言葉もなかった。中隊長は続いて「私はもはや諸君に命令する権限はないが、今までどおり私を信頼して欲しい、そして全員無事で日本に帰ろうではないか」と結んだ。

やがて「乗車せよ」との命令が下った。私たちは行き先不明のまま列車に乗り込んだ。列車はぐんぐん速力を増し北上を続けた。戦争は終わったのに今更北上はおかしいと思い、後で聞くところによると、大西角一という石頭の部隊長が、「北上せよとの命令はまだ生きている」と言って命令を下したのであった。わざわざ北朝鮮まで捕虜になりに行ったようなものである。

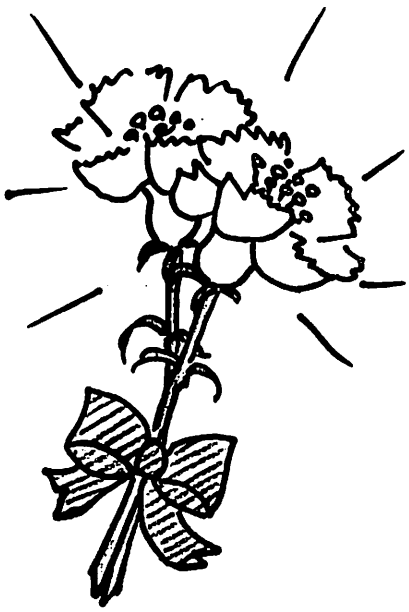
終戦の日、私たちに向って立派な訓示をした川手倬夫中隊長は、ソ連軍が北朝鮮に侵攻して来た時点に、私たち中隊員を捨て、部下の将校、下士官数名と共にトラックに乗り、釜山に向って逃走したとのことである。また、行きがけの駄賃に中隊全員の給料まで持ち逃げしたのである。

このような二人の直属上官のために、多くの部下が数年の間捕虜として辛酸をなめなければならなかったのである。しかし今、静かにふり返ってみるに、あの事もこの事も、また国の運命さえも、神様の御計画、御支配のままに動いていることを深く思うのである。（次号へつづく）

「万物は神からいで、神によって成り、神に帰するのである」

（ローマ人への手紙十一章三六節）

昭和六十三年四月一日



なんとか、神様（私の失敗）

緒方　とみ子

（その一）

神様を全く知らない家庭を与えられたのだから、なんとか、神様を教えなければとあせったのが、私の失敗。この二年間、祈りは疎かになるし、愚痴も多く、人には勧めるが、気分次第で、自分は読まない日もある聖書。しかし、現在、勉強中だと言う主人は、仕事先の福音放送で恵まれて、聞きかじった言葉を説明してくれと言い、意味がわからず、イラつく私（けんかの種）。又、私が肉的な思いで礼拝欠席している教会に、知らずに迎えに行き、帰宅して怒り、「そんな事で、クリスチャンが、どうする」と責める主人に、あやまりながら一言、説教する私。そこで、「なんとか、神様。早く、主人の名前を呼んで下さい。私、疲れました」と頼る私。しかしすぐに、「御霊によらなければ……」と、御言葉を思い出す。

（その二）

先日、自分の不注意で大事な右手の親指を、買ってもらったばかりの包丁で深く切ってしまった。その日は、朝から落ち着かない日だった。それは、ある教会の新年聖会に出かける事ができず残念で仕方がなかった。しかし、私は違った恵みを神様から頂く事になっていた（随分、痛い恵みでした）。

初めは、そんなに深く切っているとは思わなかった。絆創膏でも貼っていれば、すぐに治るだろうと軽い気持でいました。しかし、治るどころか、血は止まらず、だんだん不安になってきた。そして、傷口が深い事に気付き、手をしばる事になったのだが、主人は、疲労気味で寝込んでいて、何を言ってもわからず、息子はテレビに夢中だった。それで自分の口と左手を使ってしばろうとするのだが、力が出なかった。仕方なく、息子にしばってもらったのだが、今度は手が痛くし仕方がない。そして初めて、私は一番先にするべき事をしなかった事に気付きました。それまで、頭の中では「どうかして、血を止めなければ」と言う事と、「病院に行くのはいやだし」などと、自分の思いに頼り、目に見える物、人（動く物）に本当に頼り易い者です。

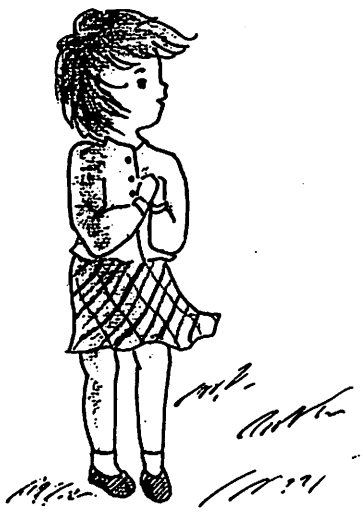
あれから、数ケ月。救急病院で、初めて、三針（黒の絹糸）縫い、しばらく不自由だった右手の傷口もすっかりいやされ、時々、思い出すかの様に、寒さで痛む時もあるが、こうして筆が握れ、思いつくままに、証を書かせて頂く恵みは格別です。

「主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ、近くお

られるうちに、呼び求めよ」

（イザヤ五五・六）

一九八八年　戸畑教会・標語



エステル会の研修旅行に参加して

高木　ツルエ

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える」　（エレミヤ書三三章三節）

祈って待ち望んでおりましたエステル会の研修旅行に、神様のお導きにより参加させて頂き感謝致しました。祈りに答えられて天候も祝され、すべてを最善に導いて下さった神様をあがめました。

「目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ」　（イザヤ書四〇章二六節）

普段は家事に追われ、自然にふれる機会の少ない私にとって、車窓から眺める新緑の山々、空や海、広々とした田園などの美しさに、心の隅々までも洗われる思いでした。また、造り主の素晴らしいみ業を見せて頂き、神様をほめたたえずにはおれませんでした。

快適なバスでのおいしいお茶やおやつなど、行く先々での心づかいに、お世話下さった方々の陰のご苦労を思い心から感謝しました。

姫松屋の「具雑煮」、銀水の「寒ざらし」。宮崎旅館でのお食事など、そのおいしかったことを今でも忘れることができません。雲仙の「みやまきりしま」は今が盛りで、ピンクのじゅうたんを敷きつめたような中から、鮮やかな緑が所々に顔をのぞかせて素晴らしい調和を見せ、その美しさに思わず感嘆の声をあげました。

宮崎旅館では、榎本先生より三回の集会を開いて頂きました。第一回は二十四日の午後四時からでした。

「わたしは常に主をほめまつる。そのさんびはわたしの口に絶えない」　（詩篇三四篇一節）

先生のお説教をとおし示されたことは、神様によって造られた全てのものが、置かれた所で力いっぱい造り主をほめたたえているのに、自分はどうであろうかと心をさぐられました。私は静かに主を仰いで光を与えられ、心に感謝が湧きました。

二回目は、午後八時からで

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである」

（Ⅰヨハネ三章一節）

神様は、私の罪のためにひとり子イエス様を身代わりとして十字架につけ、罪を許して下さいました。その上、こんな私をご自分の子供として受け入れて下さっているこの事はよくわきまえていながらも、いつのまにか恵みになれ、当り前のように思いやすい自分の心を刺されました。私は、神様ごめんなさいと悔い改め、神様に愛され子供とされている自覚を常に持ち続け、喜びと感謝をもって神様にお従いできるように祈り求めました。

三回目は朝七時からで

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい」

（ヨハネ一五章九節）

このみ言葉と共に、ご聖霊が私のうちに働いて下さり、イエス様の愛のうちにとどまる者と変えて下さいました。

武雄の慧洲園のお庭は、御船山背景にした見事な庭園でした。皆さんと一緒に庭園をバックに、先生から記念写真をとって頂き旅行のよき思い出となりました。

有田では素晴らしい陶器の数々を見せて頂きました。精魂を傾けたその作品の見事さに魅了されましたが、高価な値段にもまた目をみはりました。私自身は何の価値もない者なのに、神様は大きな代価を払って買い取って下さいました。

その神様のご愛を思い感謝致しました。

それから九州陶磁文化館を見学し、帰路に着きました。車中で榎本先生が感謝の祈りを捧げられました。私も心の中で、受けた恵みと与えられたみ言葉によって、神様に対する信仰と愛とがひきあげられたことを感謝致しました。

旅行中、私たちのために三回もの御用に当って下さいました榎本先生に心からお礼を申し上げます。

昭和六十三年六月二十九日

主人が救われて

川越　シヅエ

神様の尊いみわざによって、主人を天国に迎え入れて下さいました。

「十字架にすがる、よわきわれは、今ぞ知りぬる深きめぐみ
　我はほこらんただ十字架を　天ついこいに入るときまで」
（さんびか四九五）

主のみ名をたたえまつる今の心境でございます。

長年お祈り、またご指導下さいました榎本先生、教会の皆様、感謝お礼申し上げます。主人は成人病の後遺症で長い闘病生活でした。昨年七月十日、診断により胃潰瘍と言われましたが、癌でした。足は痛いけど、内臓が悪くないから幸せだねと語り合っていた矢先、驚き、ショックでした。手術すれば治る、元気になると主治医の話。家族一同話し合って、その日に入院となり、毎日検査で二十日位かかりました。八月六日手術と決まり、その時から榎本先生にお願いして祈って頂き、み言葉をもって力を与えて下さいました。

手術の前日、榎本先生ご夫妻、水村様とおいで下さり、祈りと讃美の時が与えられ、主人は涙を流し、声も出せないで聞き入って感動しておりました。いよいよ手術の日、正午部屋を出て手術室へ、ひと眠り四時間位で終わりますからとの話でしたが、待っている時間の長かったこと。ただ祈るだけでした。九時間位かかって終わり、総合治療室に運ばれ、しばらくして面会しましたが、麻酔がさめ切れないでいくらかわかる位でした。かねてから注射とか検血を恐れ、いやがる人が長時間の手術に耐え、無事であったこと、全てを守り下さいました神様に感謝致しました。

「主イエスを信じなさい。そうしたらあなたも、あなたの家族も救われる」
（使徒行伝一六・三一）

さまざまな中にあっても、主にあって堅く立ちなさいと教えられています。何時も力を得て、信じて祈り求めております。

主人もその後ひどい苦痛もなく、八月終わり頃から歩行器により散歩できるまでになり、この調子だと九月いっぱいで退院との話も出たのです。主人共々喜んで、家に帰ったら病気も治るような気がする。是非帰りたいと言っていたのですが、十月に入り熱が出るようになり、肺炎に気をつけねばと先生方が話しておられました。そして十月二十日、急にひどくなり、肺が真白になっていると観察室に運ばれ、胸、手、足、お尻と沢山の管がつけられ、痛々しく思いもせぬ状態になりました。二十一日、喉の痰を取るため小さい管を入れた時に、喉が痛いから

丁寧にしてくれと言いました。その言葉が最後になるとは思いもしなかったのです。そして太い管が喉に入れられ、人口呼吸器が付けられ、可哀相でどうすることもできず残念でした。自分でもどうかなりそうで必死でした。先生方は、あらゆる治療でも効きめがないから、一応覚悟して下さい、遠方におられる方に知らせをと、私はたまりませんでした。その時、榎本先生の教えの言葉を通して、この者の霊を引き出して信じる者とならしめて下さいと、繰り返し繰り返し祈り続けてまいりました。

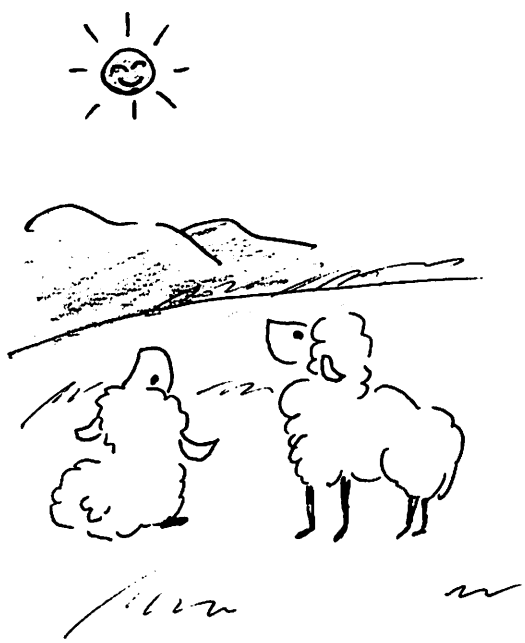
病状が悪くなって五日、家族一同見守りながら、言葉も声も聞くことなく、別れの時となりました。十月二十四日夜十時、平安のうちにこの世の生涯を終わりました。七十八才でした。主人は入院中ひどい苦痛もなく、その様子もなかったことが何よりの救いでございました。思えば、一生をただ仕事に打ち込んで来た人でした。堅い人で、時には困ることもありましたが、一生、真実に生きぬいたと思います。人にはやさしく、自分に厳しく、孤独な人でもありました。私の入信にも心良く賛成してくれました。また、教会生活にも協力してくれ、教会の話や説教なども話し合ったものです。

十二年の長い病で、とくに三年位前から足の痛みも加わって、大変な中を通って来ましたが、今、平安を与えられ、一切の罪もあやまちも許され、主のみ国へ入れて下さいましたお恵みに感謝致します。残された一人一人、主の道を歩む者とならしめて下さいますよう、同じみ国に迎え入れて下さるように祈り求めて参ります。

「汝ら心を騒がすな。神を信じ、また我を信ぜよ」

「わたしに呼び求めよ。そうすればわたしはあなたに答える」

尊いみ言葉を頂き、恵みの中におられることの幸せを感謝致します。アーメン。



リューマチ奮戦記

貞　サユリ

◎　リューマチの起こり

もう六年前になりますか、過去をふり返って見ると、ついこの間の様な気がします。

あれは五十七年の二月十一日（木）、建国記念日の事でした。その日は母の誕生日でした。木曜会に二人の子供を連れ、集会を終えて実家の荒生田へ向かいました。途中で花屋さんに寄り、母の好きな鉢植を買いました。上の娘の頼子も淡いピンクの金魚草、紅いカーネーションをリボンで結んで貰いました。末の伴枝は文具店でノート、ボールペン、手製のカードを添え、おばあちゃんにプレゼントを……とそれぞれ手に持ち、急ぎ足で母の家へと向かいました。母がにこにこして出迎え、「よう来たね。ハイ上がんなさい」。弟嫁も気さくな人で、私達をもてなしてくれました。母は私達が座ると同時に、「先ず感謝しようね」と……必ずお祈りします。久しぶりでコタツを囲み、話がはずみました。夕方近くなったので、子供達に「頼子、伴枝、さあ帰ろうかね」と腰を上げかけたその途端、足腰に異様な痛みが走ったのです。変だなあ、と思いましたが、そのまま二人を連れバス停へと急ぎました。それがリューマチの起こり始めであった、と記憶しています。

◎　日々の生活

あれから六年、現状は良くなっているのか悪化しているのか見当がつきません。その間、福岡市街から少し離れた飯倉まで治療に行きました。何度か行ったのですが遠すぎるので、熊西の貞元中央医院にも行きました。漢方薬を飲んでみたり、自分でできる生活の工夫をし、規則正しくする様努力しています。快食、快眠、快歩（万歩計を使って歩く）と努めて毎日よく動き廻り、時には遠くまで出かけたり、自分自身日々主に助けを求め、祈りながら、また楽しみながら家事に励んでいる昨今です。

毎朝私の起床は五時、目覚めた時点より戦いが始まるのです。顔はまだ天井を向いて寝床の中、首筋、肩、腰、その他全身が重痛い。「エイッ」と気合をかけ、苦痛に耐えながら身体を起こします。上着、割烹着をまとい、台所まで十歩余り、周囲の

柱、襖、テーブル等を伝いながら炊事場へ……朝食の準備をしながら食器や物をつい落としてしまう。時には鍋の蓋をガチャン、まな板をストーン。とに角よく粗相をします。御免なさいね、四階の人。わざとやっているのではないのよ。この手が悪いのだから……と心であやまりながら炊事します。時々包丁を落とす事もありますが、自分の足の上に落ちないのが不思議な位です。主が常に守っていて下さる事を痛感しています。起きて三、四十分もたつと、やっと平常な自分自身に戻れます。これが毎朝の私のパターン。戦闘開始です。

◎　私の役目

私は本当に頭が悪いんです。聖書の言葉をサッと探しあてない、思い出せない。物忘れが多い。目はかすみ、そして怠慢、子供から初老ボケと言われたりします。自分自身駄目人間だなあ、とつくづく思います。でもこんな無用の長物でも、神様は私に主婦業を与え、二児の親として日々私しかできないお役目をさせて下さいます。本当に言い尽くせない喜びに浸っています。年が巡るにつれ、苦痛も増して来ます。来年は……？と、つい先の事を考えますが……今日、いや今あなたにお従いしますから……。この苦痛の辛さ、もどかしさ。でも主は全て私の心の隅々まで御存じであり、神のなされるまま従順にお従いして行く事が私の今日の勤めであることを自覚しています。

「あすの事を、思い煩うな、あすの事はあす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である」

（マタイ六・二四）

◎　母の思い出

発病から六年の歳月が流れ、その間色々な事がありました。私にとって一番心に深く痛手を負ったのは、六十年十月の母の死でした。母から色々な事を教えられ、また思い出の数々が走馬灯の様に次々と思い出され、懐かしさ悲しさが甦って来ます。母の元気な頃、よく実家に行きました。私の身体の事を案じてくれました。私も時々不信仰を起こし、つい愚痴っぽく話すものですから。その時母が、『上見れば、及ばぬ事の多けれど、蓑着て暮らせ、おのが身の上』「まだまだ、あなたより不幸な人、苦しんでいる人が沢山いる。上を見たらいかん。笠をさすと上は見えんだろう、下を見て過ごしなさい」と先人の言葉を言っていた事を思い出します。

前田教会に導かれて、信仰の奥義、真髄、神の愛の深さ、御旨を諭らせ、自分の幼稚な信仰に鞭打たれている様な感じがします。そして今の状態は私にとって、一番最良の場所に常に置いていて下さり、一方的な御愛のもとに日々保たれ、守っていて下さる事を思うと、嬉し涙が溢れて来ます。集会に集い、御

言葉に触れる喜び、主と交わる楽しさ、生きる原動力を与えて下さる主イエス。毎日の生活の痛さ、辛さを、むしろ、エンジョイしているのかも知れません。

◎ 薬の知恵

先日主人が図書館より本を借りて来ました。私に、「これ読みなさい」と差し出しました。見ると『リューマチ』の本でした。知識として知っておくのも必要ですし、また自分でできる治療法があれば……と期待していました。一通り読みましたが、専門用語と横文字が多く、理解し難い部分もありました。痛みの種類について知る事ができました。動かして痛む運動痛、指で押して痛む圧痛、静かにしていて痛む自発痛、この自発痛が特に身にこたえて来ます。予期せずに訪れるのだから……。特効薬がありますが（ステロイド剤）、多量に服用すると副作用を起こし、顔が満月の様になり（ムーンフェース）、他の病気を併発する事もあり得るとか……。とに角原因不明であるし、詮索の方法もありません。現代の医学では、根治する事は無理な事でしょうが……神には何でもできない事はないと信じています。今私は、薬はできるだけ使わない様努めています。毎日の家事、歩く、適当に体を動かして働く。いつも喜び、絶えず祈り、全ての事に感謝する。これが何にも勝り、唯一の良薬である事を信じています。

◎ 夢のはなし

入浴してすぐ寝床に入りました。誰しも味わう快い一時です。うとうと眠気を催して来ましたが……その時、大敵が現われました。右大腿部の痛みです。例の調子で右手でさすりました。だが痛みは止まない。時は流れる。一時間、いやそれ以上……私は平たいアンカを患部にあて祈りました。「主よ、今身体の中で痛さと眠気が、相撲をとっています。どうぞ眠りを勝たせて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン」枕元の時計を懐中電灯でのぞきました。十一時少々過ぎていました。それからどの位時間が過ぎたでしょうか、いつしか眠りに誘われ、夢の世界へ……。

体育館程もある大きな広間に、大勢の人がたむろして座っていました。グループごとに五、六人、七、八人、あるいは十人位、と沢山のグループがひしめき合っていました。畳が百帖位敷きつめられていましたが、よく見ると何と、そこは火葬場でした。私は広間の一番後の方に立っていました。一番前方の左手より、上から下まで真白いマントの様な服を着た、長い髭を生やした老人が出て来ました。無言のまま、つっ立っている私を見て、手招きをしています。そして自分の後方を指していま

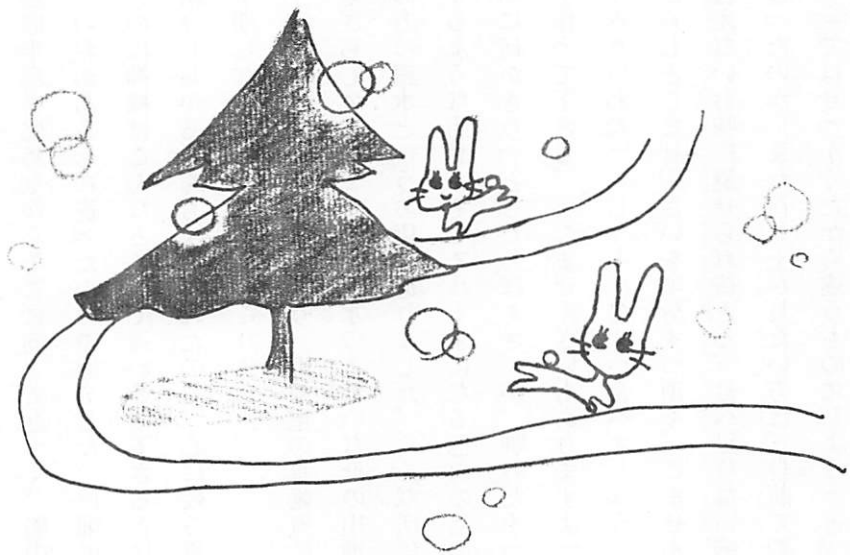
す。その動作を二、三度繰り返しました。私は、たじろぎました。その老人が示すには、後にある棺おけに入れ、と言っているのです。私はブルブル震えて、すぐ傍のグループの中にまぎれ込みました。老人はしらぬ顔をして何かペラペラ喋っています。私は胸をなでおろし、老人を人陰からのぞき見ていますと、老人はステッキをふり廻していました。クネクネと曲った杖、いつか旧約聖書物語で見た、アッ、あの老人の杖はアロンの杖だ。モーセの口となり、奇蹟を行った、あのアロンの……それから先は覚えていません、ふと目が覚めました。四時を少々廻っており、痛みはすっかり消え、ぬくもりの中で、主に感謝を捧げました。

「むしろ、キリストの苦しみにあずかれば、あずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現われる際に、喜びにあふれるためである」（ペテロI四・十三）

「しばらくの苦しみの後、あなたがたをいやし、強め、力づけ、不動のものとして下さるであろう」（ペテロI五・一〇）

今は専ら、集会に出席させて頂く喜び、毎日毎日を大切に、精一杯暮らし、祈りと讃美に日々過ごしています。

昭和六十三年二月

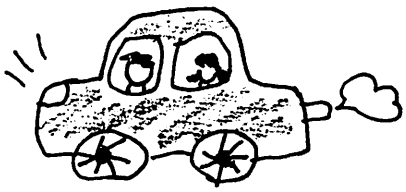


エステル会研修旅行記

野村　美恵子

神様の御計画

祈って参りました旅行が近づきました。いつもながら細やかな心のこもったスケジュールを見せて頂き、今回も黒一点参加させて頂くつもりでいた主人、行かせて頂ける時に行きましょう、（又のチャンスはないかも知れない）と楽しみにしていたのに、前日の夜少し熱があるようだと言うのです。大した事ではなかったので何とか行けるのではないか、と一瞬思いました。併し神様は何と言われるのでしょうか、祈って待ちました。神様の御計画は私達の思いとは違う事を教えて下さいました。神様のお答えは静まっていなさいと言われます。弱い主人に良い方法をもって導いて下さった事を感謝し、私は主人についての心配なく一人で参加させて頂きました。



戸畑からは伊規須婦人、中村姉、森岡姉、私と四名八時のバスに乗り込み、私は森岡姉と同席させて頂き二日間主の恵みを感謝しつつ語り合う時が与えられました。日頃はゆっくり話す折もないので、主にあって語り合えるこの幸、旅行ならではの喜びの時でした。天気に恵まれ、長洲からのフェリーも波静か、遠く島原半島を眺めながらそこに向って近づく。船中で飯田（恵三）のおかあさんに逢ったのは奇遇でした。戸畑にいても逢わないのに神様はこんなところで逢わせて下さるとは。早速先生に紹介しおかあさんも挨拶されたので、心に残る事と思います。予期しない事がいろいろ起こりました。

こうして予定通り島原にて昼食となり、姫松屋の具雑煮にお腹を満し、寒ざらしに迫ります。湧き水のきれいな浜の川地区の露路の奥の方に銀水というお店はありました。こんな所に時代劇に出てくるような店舗、そして八十才になる色白の品の良い優しさの中に何かきりっとしたおばあさんが、馴れた手つきで寒ざらしを作って下さる。「ごまぜんざいもありますよ」「どちらも食べてみたいわね」「じゃあ半分ずつ食べましょう」二人一組で寒ざらしとごまぜんざいを半分ずつ頂く、ごまぜんざいの何とも言えないお味に魅せられ皆さん、食べ足りない感じを解って下さったのか「まだ召し上がりたい方は、自前で御自由に……」「ではせっかくだから違うものにしよう」と、ところてんを食べた。どこにでもあるし、また戸畑で食べるところてんと別に変わりないけれど本当においしかった。水が良い

からでしょうか、おばあさんの心でしょうか？「おばあさんお元気で続けて下さい」とついお別れに……。お店には有名人の書いた色紙や絵が所狭しと掛けてあったけれど、あのお年でどんな気持で毎日働いておられるのだろうか。生きがいと思っておられるかも知れないけれど、神様を知られないのでお気の毒にも思えました。そして一抹の淋しさを感じました。

再びバスに乗り込み、新緑の素晴らしい山道を登ります。緑の色の多種多様に驚きの目をみはる様です。神様のお造りになった季節の色を愛でながら仁田峠に着きました。みやまきりしまは最高の見頃でした。何とかこの美しさを持って帰りましょうと、初めて使用するカメラに自信なく納めて見ました。ケーブルカーから見る山々、また下を眺め、随分高い所に来ているのを感じながら更に妙見岳の頂上まで登る事ができて感謝しました。余り良い体調でなかった私に神様は充分なる力を下さって、「わが力は弱きとき強ければなり」と証明して下さいました。

時間通り宮崎旅館に到着。一同集合して先ず神様に感謝の集会が持たれました。詩篇三四篇一節～五節「わたしは常に主をほめまつる。そのさんびはわたしの口に絶えない」一節のみ言葉を頂き、あの美しいみやまきりしまの花の下の草むらの中に小さな小さな花が人の目にも止まらないような状態の中で精一杯咲いている……その様にと語って下さいました。

私は主にあがなわれた者として、常に主をほめたたえているだろうか、讃美の足りなさを探られます。

夜の集会では、ヨハネ第一の手紙第三章一節～三節　一節

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんな大きな愛を父から賜わったことかよく考えてみなさい。わたくしたちは、すでに神の子なのである」

私達は神様の事をいつも考えているように、それは十字架のあがないによって神の子とされた感激を常に新たにするように……。

今日一日夕べに到るまで神様の守りの手に支えられ全ての行程を終える事ができました。バス、船、人とのふれあい、神様のお庭なる自然、現実の肉なる楽しみ、喜びを与えて頂きました。その上に最も大切な霊の糧を充分に頂いて、二人の姉妹と共に安らかな眠りに……。

明日はまた主によって導かれる素晴らしい旅を信じつつ……。

今、思うこと……（二十歳篇）

木原佳子

この地で二十年余り過ごし、まず第一に思い起こすのは、やはり〝受洗〟のことです。〝受洗〟それは、思いもよらなかったことであり、全くの導きでした。とにかく、話には聞いていたのですが、想像、期待、そんなことを超越した素晴らしさがそこにはありました。あえて表現するならば、〝光に包まれ、満たされた感じ〟でしょうか。とにかく、この素晴らしさは体験するに限ります。

そう、あれから二ケ月ですか？　見る物、聞く物、全て新しい世界を満喫でき、二ケ月しか過ぎていないことが嘘のように思えます。

最近、神様が私を子として取扱って下さっていることを痛感し〝こんな私を、これほどまでも愛して下さるなんて！〟そう叫びたくなるのです。

――ある日、こんな事がありました。

白昼の、いつも通りの街、そこに一枚のハンカチが、ポトリ……。バスを待つ婦人の手から落ちたのだ。前方五メートルに起こったことだった。

〈心の中で――〉

「ほおっておこう。私は急いでいるのだから」

「いや、落とし物をした時の悔しさを、君は知っているはずだ！拾ってあげよう」

「待てよ、誰か他の人が気付くかも知れない、私が拾わなくても、それに親切ぶるのは恥ずかしいし……」

そんな事を考えているうちに近づいてきた。

「ああ、通り過ぎてしまう！」

その時、足が止められ、手にハンカチを握っていた。その瞬間〝はっ！〟とさせられ、慌てて婦人の手にハンカチを渡した。婦人のお礼の言葉は、背中に暖かく返ってきた。

こんなささいな事ですが、そこに神様が子として、証人として、力を与えて下さっていることを知ることができ、心が熱くなるのです。〝さあ、私の後ろで支えて下さってる方、この方を見て下さい。この方にこそお礼を言って下さい〟と、お話したくなるのです。

このようにして、生後二ケ月にふさわしく、取扱われて喜びあふれています。そこで御言を一つ。今より後の私へ……。

「主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を、むち打たれるのである」（ヘブル十二・六）

〝主の御名が高らかに崇められますように！　アーメン!!〟

祖母の思い出

林　磨璃子

「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒行法一六・三一）

何度も聞いているこの御言葉に、私は一瞬ハッ！と驚きました。

それは、今まで全く思い出したこともない祖母の事が、急に思い出されたからです。

今は亡き母が、時折話していた祖母（母にとっては姑）の事をさだかでない私の記憶をたどっていくうちに、五十年近く前のことですが、針仕事をしながら、何かぶつぶつひとり言を言っていた祖母の姿が、はっきりと浮かび上がってきました。

母から、あれは讃美歌を歌っているのだと聞かされましたが、私は何の気もなく、その事は完全に忘れてしまっておりました。

でもこの度、この御言葉を通して、祖母のあのひとり言は、讃美と共に、息子達家族や孫達の救いを祈っていた祈りであったことを、はっきりと教えられました。

それは、何と忍耐のいる祈りであったでしょうか。

祖母は、明治元年医者の娘として生まれ、十六才の時、お人形を抱いて祖父のところへお嫁入りして来たそうです。教職にあった祖父が、早く亡くなり、三人の息子を育てる生活は、大変苦しかったと言うことです。

その頃、お隣りに宣教師の方が来られ、その方のお手伝いをさせて頂くうちに神様を知り、クリスチャンになったそうです。

その祖母の晩年は、終戦の年の二月、戦争の激しい時代とはいえ、東京の聖ロカ病院で静かに召されたそうです。

「これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした」

（ヘブル人への手紙一一・一三）

この御言葉どおりの生涯を送った祖母が、今こうして私達を励まし、救われたことを、どんなにか喜んで感謝していることでしょう。

神様は、私のような小さくて、弱い、愚かな、その上罪深い者でさえ、このような御言葉を与えて、思いを起こさせ、神様

の御愛を知らせて下さいました。

「あなたがたが、わたしを選んだのではなく、わたしが、あなたがたを選んだのである」（ヨハネ一五・一六）と言われる神様に、お従いさせて頂くお恵みを感謝し、まだ救われてない家族のため、祖母の様に確信をもって祈り続けていきたいと思っております。

詩「イエス様」

瓜生　美知子

私が苦しむ時
それはイエス様です
私が喜ぶ時
イエス様の栄光です
生きるにもキリスト
死ぬにも益になりたいのです

手を引かれて　とぼとぼと
歩き始めました
ふと　右を見ると　イエス様が
立って笑っておられました
また　歩き出しました
着いてみるとパラダイスでした
悟りのにぶい者です

イエス様
あなたの御衣にふれさせて下さい
お言葉を下さい
見ないで　信じる者はさいわいです

エステル会研修旅行に参加して

岩　隈　多賀子

前田教会に八時二十分に集合するには家を七時半に出発すれば間に合う。丁度通り道だから築山姉を拾って行こう。そう考えた私は、前の晩に彼女に電話をかけた。「朝のラッシュにかかるから、私にかまわず、早めに出て教会へまっすぐにいらっしゃい」とかえって注意して下さった。神様のお恵みの始まり。

戸畑から乗車された方々を別にして、前田集合の七人の方々の点呼をとってバスは時間通りに黒崎バスセンターへ向かった。ここで全員が揃って（野村先生はお風邪で不参加。楽しみにしておられたのに……）賑やかになった。私は一番後の長椅子を独り占めにして横になる。枕が備えつきであった！　皆さんの花やいだ談話の声が快く眠りにさそう。

どのくらいの時が流れたのか、「ここが有明海？」との声に私は「そんなことはないでしょう」と起き上がった。「バスを降りて下さい」と言われて、皆さんの後に続いてバスを降り、バスの前をまわって階段を登った。入口を入ると右手に売店があり、その前方に並んでいる椅子に皆さんが座っておられた。待合室かと思いきや、何とすでにフェリーの船室であった。船尾に来るように誘われて、その船室を出ると目の前に海が広がっていた。「向こうに見えるのが、これから行く島原だろう」「いや、小さな島が見えているのだろう」などと、遠くかすんで見える島かげを指差す人々の声を聞きながら、方角の解らない私は黙っていた。その上、今降りたバスが階下に乗っていることも、この船が幾台ものバスを乗せている大きなフェリーであることも知らなかった。教えられて思わず大声を出すと、友人が楽しそうに笑った。「あの船くらい？」「あんな小さな船であるもんね！」　ふと思った。この船を出て外から眺めなければ、その大きさを見ることはできないのだ。神様の偉大さも同じこと。私はその手の中にいる小さな虫にすぎないのだから。

やがて船がゆっくりと半回転して走り始めた。あとに残る白く泡立つ一筋の線を見ながら、「私たち信者の人生も、前には道が見えないが、後に神の恵みの跡を見ることができる」と、メッセージの一部を思い起こしていた。その白い線も遥かかなたの海の中に消えている。全く、「人生航路」とは良く言ったものだ。

この旅行中の食事もお茶の時もことごとく豪奢そのもので素晴らしく、いろいろと計画を練って下さった方々に感謝の言葉もありませんが、仁田峠では神様のなさる造形に圧倒されてしまった。麓から頂上までの様々な「みやまきりしま」もさるこ

となながら、ロープウェイで頂上へ登り始めた時、乗り合わせた人々が一斉に歓声をあげた。足下に広がる不思議な樹海に驚いたからである。「さんご礁のようだ」と、その珍しい美しさに感心したように誰かが言った。それは、内側が黄緑で回りが濃い緑色をした花キャベツを山一杯に並べたようにも見えた。はじめ、私は「おもしろい葉を持った木だなあ」と眺めていた。ところが、それは古い葉と今年芽吹いた新葉が織りなす紋様であることがわかった。この時期でなければ見ることのできないものであった。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった」（創一・三一）主の栄光を見た感動が胸一杯に広がった。夕べに雲仙宮崎旅館の裏手にある地獄をめぐりながら、主の復活の力を思って心が踊った。更にみ言葉の裏づけを頂いて、恵みに恵みを加えられる旅は翌日も続いた。

この度の旅行に参加させて下さった神様の御名を心からほめまつります。

一九八八年七月四日

母から娘へ

K・M

目にしみ入るような新緑の美しいこの良き日、婚約おめでとう。

貴女が永い間祈り求めて、夢にまで見たこの素晴らしい婚約式。この感激と喜びを主に感謝すると共に、神様の御愛と御恵みを貴女の心に忘れる事のないよう切り刻んでしるしとしておくように……。また、貴女のために先生はじめ多くの方々が祈って下さった事、さらにこれからも祈って下さる事を心にとめておくように……。

貴女の姿を見ていると、生まれ育った巣の中から、大きな羽を広げて大空を舞い上がり、新しい巣を作り始める時がいよいよ来たのだなという思いと共に、貴女達に母親としての願いがあります。

彼の大きな愛だけでなく、御両親様や御祖父母様の愛を受けて新しい生活を始める貴女、どうか優しさと真実とをもって嫁いで下さい。そして、私が永い年月持ち続けてきた信仰を貴女に贈る事ができたら、母親としてどんなに幸せな事かと思います。

私達は、いつも神様の恵みの中で生活してきましたね。病気の時、悲しみの時、試験の時、就職の時、いろんな時、祈りましたね。神様はその時その時に応じて道を開き、また憐みをもって慰めを下さいましたね。就職試験の時、縁故がなくて失望に陥っていた時、御言に信頼して祈りましたね。

「ある者は馬を頼り、ある者は戦車に寄り頼む。しかし、われわれはわれわれの神に寄り頼む」（詩二〇・七）

その時、不思議な御手をもって道を開き、主は生きておられる事を知らしめて下さいましたね。また、その導きによって、貴女は彼と出逢う事ができ、愛する人を得たのですよ。すべては主の御愛による御計画なのです。

貴女の幸せそうな顔を見ていると……限られた愛だけでなく、もっともっと大きな愛を神様から賜わっているこの喜びを知ってほしい。恐れも不安もない、愛と感謝のある生活を送ってほしい……これが母の願いであり、祈りです。

一月三十日、彼が結婚を前提に交際をさせてほしいといって来られた時、お父さんは九州人と東京の方では色んな面で違いがある、それを理解し合って、努力し助け合っていけるのならと言いましたね。私はまず信仰をと言いたいところ、まだはっきりした信仰のない貴女に、それを彼に願う事はできないので、この子はお腹の中にいる時から祈って育って来ました、主の恵みと多くの方々の祈りの中で成長しました。だから結婚式は教会で、神様の前で誓いをして頂けるならと言いましたね。それを彼と御両親様が気持よく受けて下さり、本当に感謝だと思います。

神様のもう一つの恵みを、貴女の心にも記していると思いますが、横浜で結婚式をという先方様の希望で、結婚式をして頂く教会を探すのが大変でしたね。あまりにも先方様に御迷惑をかけてしまうので、ある時はこの世的に妥協しそうになった時、お母さんそれでいいの、とかえって貴女に励まされました。

八方ふさがりの時、一つの小さな教会が与えられ、本当にうれしく、主が道を開いて下さったと神様をほめたたえ、感謝しましたね。しかし、それがこの世的に考えるといろんな問題があって、祈っている時、

「心をつくして主に信頼せよ。自分の知識に頼ってはならない。すべての道で主を認めよ」（箴言三・五）

御言葉が与えられ、いろいろ迷いながら先生に相談しましたら「ヨルダン川を渡りなさい」と祈って下さいました。「はい、そうします」と言って帰りましたが、信仰のない御両親様にどのようにお話すれば理解して頂けるかと、ただもう主を仰いで、契約の箱をかついでヨルダン川を渡るべく、飛行機に乗り込みました。

するとまあ、神様のなさる事はなんと素晴らしい事でしょう。思いもしなかった、願いもしなかったいたれりつくせりの道が用意されており、主は全能者であられる事を知らしめて下さった。すべては主の御計画だったのです。

どうか、このいろいろな恵みを心にとめて結婚式に臨んで下さい。これからの生活に信仰を持ち続ける事は、いろんな戦いもあり、大変だと思いますが、勇気を出して主を信頼して歩んで下さい。私がお父さんと結婚する時は、まだ神様の事も、先生に御相談する事もよくわからずして、弱虫で愚かで、自分の気持（信仰の事）さえはっきり言うこともできないまま結婚しました。しかし、主の許しと憐みで小さな信仰の火は、くすぶり続けながらも、それを消すことはできません。

どうぞ、この聖火をあなた方が受け継いで下さい。小さな火でも構いません。神様がきっと明々と燃え上がらせて下さいます。

どうぞ、日々の生活の中で、主の御愛を知って下さい。そして、母親を思い出す時、どんなに母親が幸福な毎日であったか、それはどうしてかを思い出して下さい。この手紙もね。

あなた方に主の恵みと祝福がある様に、何時もいつも祈っております。

「あなたがたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」

「すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である」（伝道の書十二章）

――投稿に当って――

礼拝の報告の時、いつも「どなたも、ぶどうの木の原稿をお出し下さい」とお聞きする時、文才のない私は、他人事のように聞いておりましたが、ある時、先生がテーマを出されました。その時から神様は、お前もだよと指さしがありました。

さて困ったといろいろ考えましたが、どうせ恥を忍んで出させて頂くなら、娘にあてた手紙をお証しとさせて頂ければ、娘によい記念として手元に残るのではないかと思い、皆様の大切なページを汚させて頂きました。

本当にありがとうございました。

どうぞ、母親の願いを覚えて、お祈り下さいますようお願い申し上げます。

今は恵みの時

匿　名

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」
（コリント第二・六・二）

私は今まで、周りの事情が自分に都合よくなると「神様は祈りを聞いてくださった、恵んでくださった」と、感謝していました。確かに、主は恵みをそのような形でも注いでくださいます。

しかし、自分に都合よかろうと、悪かろうと、主の恵みは時々刻々注がれていること、今が恵みの時、救いの日であることを教えられています。

どんな事情の中にも主は共にいて、喜びと安息の中に置いて頂ける道が十字架の血によって開かれ、私はただ開かれた道を御旨に従って歩いていけば、そこに安息の毎日があることを教えて頂きました。

毎日、主に従った歩みができるように、聖霊の助けを祈っております。

道

緒方　とみ子

――この証を、私が仕える御主人様江――

◎霊による御主人様

いつも安全運転と私達家族の健康を守り、色々な出来事を通して、証を書かせて頂きます御恵みに、心より感謝いたします。

◎肉による御主人様

あの時は、腹痛で早く帰りたかったとの事。もっと素直になって、二人で神様を崇めて、感謝いたしましょう。

新年聖会で恵まれて、戸畑教会まで主人と息子が迎えに来てくれて、喜んでいたのもつかの間。帰り道の事です。八幡駅前で夕食を終え、大谷から高速道路を通り鳥栖まで、主人はいつものコースで帰宅する予定だった。しかし主人は、新年会で二日酔いのため、息子に運転をさせていたところ、鳥栖付近から息子は「久留米を通り、自分の知っている道を通った方が早い」などと言い出し、突っ走っている。まだ免許取り立ての経験浅い息子だけに、主人は、自分の経験（運転歴二十二年）を生かして教えて上げようとしたのであるが、「親ゆずりで、うまい！」

と言われている息子だけに、つい口答えをしてしまった。すると、その言葉が気にさわったらしく、主人は、かんかんになって怒っている。後の座席にいた私は、主人に「運転している人に任せなさい。どの道に行っても同じでしょう。間違ったら、引返したらいいだけの話でしょう」などと言ったのだが、気の短かい主人は、相当血圧を上げている。すると主人「随分と遠まわりをしている。俺が教えているのに、あの口のきき方は……（言葉にならない）。運転ができないと思って、馬鹿にしやがって！」と言い、とうとう車から降りて運転をすると言い出し、息子と替わってしまった。私はびっくりしたが、一本気な二人だけに、なかなか相手を認めないから衝突したのであるが、乱暴な運転をした主人――本当に早く北野に帰り着いた。お疲れ様でした。有難うございました。また宜しく！

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」（コリント二・六・二）

手術の後に残されていた愛の糸くず

綾部時男

「あなたがたがわたしを選んだのではない、わたしがあなたがたを選んだのである」（ヨハネ一五・一六）

私は小さい時からできの悪いひねくれた根性の中に育ってきた。いとこ同士の血族結婚がわざわいしたんだろうか、そんな事も考えたりした。頭のできが人一倍悪く、小学校に通っていた時からどん尻から二、三番目だった。頭が悪いから、悪智恵の働くことは素早かった。先生と一緒に何人かのクラスの生徒と近くの竹林に入って、小さな根をとりに行った。今のご時世であれば、指揮棒はプラスチックでできた立派なものがあるが、五十年も昔のこと、わらじを履いて学校に通っていた時代で、おばあちゃんは川で洗濯を、おじいちゃんは山に柴刈りに……と、そんな時代の中であった。先生が生徒の頭を叩くムチにも使うので、できるだけ小さいものを選んで、土の中から堀り出したりしていた。また、教室の入口の戸口に黒板拭きを挟んで閉めて置くと、先生が戸を開けた途端に頭の上に落ち見事に命中、痛快この上もない。先生も一ペンわなにはまると用心して注意しだした。教壇の上にあがるところに掃除用具を入れると

ころの蓋を少しずらして置いたりして、先生が引っくり返るのを見て楽しんだ。また、教壇の机の先生が立つ前側に白墨を塗って置く。たちまち先生の黒いズボンはものの見事に白線が引かれてみんなが笑う。「コラーッ、だれがしたか」と言う。「ざまあ見ろ」である。誰一人知らん顔をしている。

そんな私が真の救い主であるイエス様の救いに預かったのは昭和五十年十一月頃だった。あれは忘れもしない夏のまっ盛りだった。右足に急激に痛みを覚えて、北九州黒崎にある総合病院に入院することになった。検査の結果が右足脱疽と判明された。右足のヒザ下の部分から血管が縮んで血の通いが鈍くなっていて、急きょ手術せねばならない状態にまで追い込まれていた。手術といっても、足のつけ根か足の指か切断せねばならないようなまでに悪化していた。五本の指の爪はことごとくはがされて、その爪の下から膿が吹き出て、血色はほとんどなくなっていた。もう痛くて痛くて我慢ができない。足の指先が溶け出した。もうたまらない。先生早くこの指を切り落としてとお願いしたが、もう少し様子を見てからと言って、一向に切ってくれない。

何日か過ぎて看護婦が手術をせねばならないので、ご家族の方を呼んで下さいと言った。今は十三年前に別れてしまった妻子は、細々とした生活をしているだろう。しかし、このことを知らせたとしても来てくれるはずもない。会社の公金まで横領して会社は首になり、妻子を捨てて山口県まで姿を消し、今では煉瓦工として身を隠している手前、連絡をとることもままならぬままに迷惑は掛けるだろうと思ったが、叔父（高木）が教会にいる事を知っていたので、教会に電話をして叔父の住所を教えて頂いて、早速こうこうこうだからと手紙を出すと、すぐ飛んで来てくれて十五年ぶりの対面をした。叔父は私が元気でいてくれたことを涙を流して喜んでくれた。この時に、私のような傷つき汚れた極悪非道な者を、神様が温かく迎え入れて下さったのだ。

それから毎日のように暑い太陽の照りつける真夏にテープレコーダを持ってきて、説教のテープ、百万人の福音、教会誌等を持って来てくれるようになり、帰りには私の頭に手を置いて（われ万物を新にせん汝の病十字架に移転せり）なんて言って祈ってくれた。当時、ちっとも何とも感じなくて、部屋の人に恥ずかしい、やめてくれと言いたかったが、また来て同じように祈る。もう少し小さい声で祈って欲しかったのに、当時の叔

父は一生懸命に祈ってくれ、私の足の腐敗しているところを押えて、涙を滲ませながら真剣な祈りを捧げてくれた。

私は持って来てくれた説教テープを、毎晩毎晩眠れぬままに、みんなが寝静まった暗い暗い部屋の中でイヤホンを耳に当てて、そのみ言葉に聞き入った。足の指先は徐々に溶けて行くあまりの痛さに、口の中へハンカチやガーゼを口一杯にくわえる。痛み止めの注射は二時間おきに打つ。中指はとうとう溶けてしまった。痛みをこらえて涙の中で聞いた真実な神の言葉は、私の魂をとらえて放さなかった。そして、幾晩か眠れぬままに聞いているうちに、変色していた指先に赤身がさしてきて痛みも徐々に和らいできた。私は毎晩叫び続けた。神様、助けて下さい……痛を少しでも和らげて下さいと、本当に藁をもつかむ思いである。

それから日に日に快方に向った。驚いてしまった。びっくりした。あんなに苦しみ、痛み、血が通わなくなっていたものが、どうして血が通うようになったんだろう。もうそうなると嬉しくて嬉しくてたまりません。部屋の中が塗装して美しくなったんだろうか、硝子戸も新しく取り替えたんだろうと思う程に、部屋にいる人達の顔も輝いて見え始めたんです。もうじーっとしておれなくなって、隣りの部屋、向う側の部屋の人達にイエス様の奇蹟の話をして歩くようになっていました。私とバッタリ会った部長先生はびっくりした顔をなさって、あなたは来週に手術の予定だったんですと言われ、神様の奇しき御業を讃美した。

そして更に、今から三年前には胃癌のためと腸の手術を二回にわたって受けている。

その時も生死をさまよう苦しみの体験をして、九死に一生を得て退院させて頂いているが、もう恐らく駄目でしょう、望みをかけないようにと主治医からの話があったそうだけど、もう一度この世に、神様の深い深い哀れみのうちに生かして下さった。卑しい者、本当に箸にも棒にもかからない者にも世に勝つ勝利の信仰を与えて下さった。そればかりではなく、別れていた妻子達とも再会し、子供、孫達二人も元気に毎日を送らせて頂いている。

現在は会社も停年退職した。ただ、神様一筋に生きる者として下さっている事、神共に在すその事が何よりも感謝です。

ある初夏の朝、突然に手術の後の縫い合わせ目に痛みが走る。

見ると、縫い合わせの上の方が赤く充血してふくれ上がって、小さな梅干しくらいの大きさになっている。すぐさま病院に車で突っ走る。診察室の前で二時間程も待たされ、診察台に横になる。手術した後に縫い合わせたところに目を移した主治医は、赤くふくらんだところを見て、これ一体なんでしょうと不思議そうに患者に聞く。医者がわからんで患者がわかるはずはない。少し痛いかも知れませんがと言って、麻酔もせずにメスでその部分をほじくり出した。血が滲んで、腹の上を流れる。しばらくして、こんなものがありましたと、丁寧に忘れていた三つの糸くずをピンセットで挟んで自慢げに言う。もう少し残ってますが、一度に取ると胃に障ってはと、明後日にまた来るように言う。二時間程も待たされ、診察わずか十分足らず。そのように病人の多いことにびっくりしてしまう。

先程長椅子の上に置いていた「百万人の福音」を取りに行こうと目を向けると、見知らぬ中年の男の人が一生懸命に読んでいる。しばらく様子を伺っていると、頁をめくった。とても真剣な顔をして読んでいる。傍にかけ寄るとその本を私に戻す仕草をした。よかったらどうぞ読んで下さいと言うと、ありがとうございますと言って又読み始めた。私自身とても嬉しくなった。何だか損をしたのか、得をしたのかわからない。複雑な気持でもあったが、何となく心がすがすがしい気持にさせられた。

そして次の次の日の診療の時にも、同じように長椅子の上に読みかけの「百万人の福音」を置いて診察が終わって戻って来ると、今日は三十才位の若いご婦人が一生懸命読んでいるので、その人にもよかったらどうぞと言って差し上げた。

私は手術の後に残されていた糸くずの診察に来たお陰で、神様に素晴らしい愛の深さを教えられた。何とかこのご病人の人々に神様の愛を伝えることはできないだろうか、その事を真剣に考え始めた。この病院に古くからの友人が理髪店を経営している。そこで先ず、店の中に古い「百万人の福音」等を置かしてくれまいかと相談すると、快く引き受けてくれて、今では待ち合わせの時間に何人もの人が読んでくれているそうである。

更に私が停年になって老人ボケしないようにと、神様がワープロを与えて下さった。毎朝聞いている世の光の番組放送、それに日曜礼拝メッセージは残らず録音している。それをワープロで打って病気で苦しんでおられる方にお伝えできたらと思いついた。それは神様が私にこうしなさいと導いて下さった事に外ならない。私が神様を全く知らない時に、あの苦しみの中から神様に叫び求めた。そのような中から、今同じ苦しみに遭っている方にプリントを配り続けて半年余りが過ぎてしまった。

病院に行くと、たくさんの方がさまざまな病気の中で苦しんでおられる。今私が知っている、病気で入院したり検査に来ている人がたくさんおられる。自分が好きこのんで病気になった人は一人もいない。それなのに自分がどうしてこんなに苦しまなければならないのかと神や仏をのろっている。しかし、人間の力ではどうすることもできないということはわかっていない。そのくせ自分が一番苦しい病人であるみたいな顔をしておられる。そしてその中から神様助けて……と心の中では叫んでおられる。自分の力や金や権力でどうにかなると思っておられる。その苦しみの中におられる方々にも、その中から神を求めておられる方がある。その方々に神様の愛を運ばせて頂くお手伝いをさせて頂くようになった。最初振り向きもしなかった人も、今では大変に喜んで読んで下さるようになった。最初のうちは容易にプリントを取ろうとしなかったAさんは、こう語ってくれました。「私が見たあとで部屋の人に見せてあげて、看護婦さんにも読んでもらっている」と、苦しい息の中から語ってくれました。その方がまるで喜び一杯の顔をして話してくれた事、もう嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

そのAさんは、床の上で座って人工呼吸器を当てて苦しそうに語ってくれますが、以前よりずっと快方に向っていて、元気を取り戻してきました。

Sさんは、三浦綾子先生の本や星野富弘さんの本を読んだりして、家の女房にも見せてやりたい等と言ってくれています。まだたくさんの方の喜びの話を聞かせて頂く度に、もう神のなさる奇しきみ業に驚き感謝一杯でございます。

私が苦しんでいた時に、叔父（高木）が私のためにテープや教会誌等神の愛を届けてくれたその事を私自身が今神様の前に働かせて頂いている事が、どんなに神の深い深い恵みの賜であるか、量り知れないのです。聖書はこう言っています。

「あなたがたのうちに働きかけてその願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」（ピリピ人二・十三）

今、私がワープロで打ってコピーしたプリントをお渡ししてる方は数十人にもなりましたが、まだまだたくさんの方が主イエス様の救いにあずかる事を願って祈り続けております毎日です。時がよくても悪くても、み言葉を語り続けなさいと言われています。今、自分の苦しみ痛みにかまってはおれない。選ばれた私は、今主の素晴らしい使命を与えられている事を感謝せずにはおれません。聖書の言葉パウロの証し

「主イエスから賜わっためぐみの福音をあかしする任務を果たし得さえしたら、この命は自分にとって少しも惜しいとは思わない」（使徒行伝二〇章二四節）

心の記録（旅の思い出）

貞　サユリ

エステル会の旅行に初めて参加させて頂きました。感想を書くようにとのお電話頂き、文才のない私……どうしよう……と戸惑いましたが、主に祈りながら過去をふり返り、つたない文で綴りました。

二日間の旅を終え、今ふり返って何をどんな風に書き留めて良いのか戸惑っています。

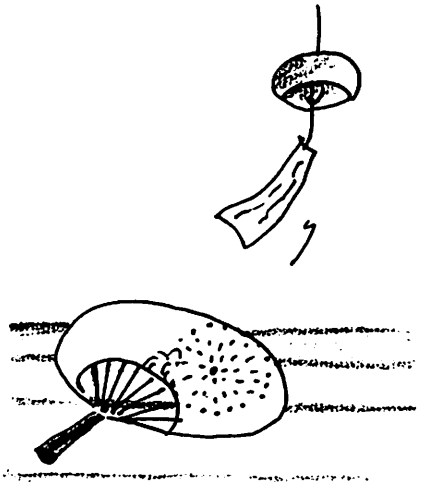
先ず、お天気に恵まれた事が何よりの幸いでした。旅立つ日まで、毎日祈っておりました。個人的な事ですが、留守にする家族、子供達の事、次に自分自身の体調が整えられるように、この二つが私の願いでした。主は私の願いにも勝る素晴らしい二日間の旅を与えて下さって、唯々感謝でなりません。

私達は北都観光バスで旅立ちました。車窓より目に映る辺りの風景、爽やかな新緑の心地よさ、フェリーのデッキから見下ろす滔々と湛える白波、又珍しい食べ物等、すべてがこの時しか味わう事のできない楽しさを、主が備えて下さったと感謝しています。仁田峠での素晴らしい眺め、みごとなつつじ、主が一つ一つの花びらにまで愛を注いで下さり、又ケーブルから目に映る新緑の雄大な景観に、身も心も洗われるような感じでした。私は幼い頃覚えた讃美歌を思い出しました。

山も野辺も空も　林も流れも
御神のみ心を　顕に示せり

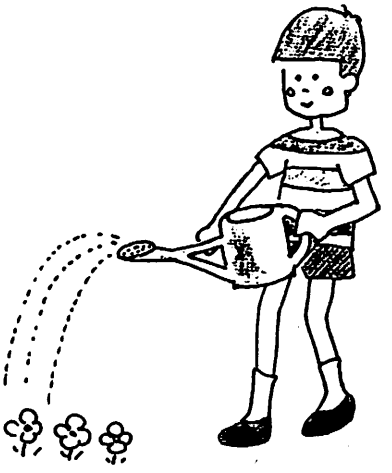
ふと、口づさみたくなるような神の御業の素晴らしさを讃えずにはいられません。向こうに雲仙岳がそびえ、ゴルフ場も見えました。そして、ふと昔を懐かしく思い出しました。それは修学旅行であの芝生を、歩いても歩いても山の麓までほど遠く、同じ所をいつまでも歩いていたような錯覚に陥った事がありました。

それからしばらく又バスにゆられ、宮崎旅館に着きました。



部屋で一同安堵に落着き、榎本先生よりお言葉を頂きました。
「わたしは常に主をほめまつる、その讃美はわたしの口に絶えない」（詩篇三四・一）
讃美歌　九〇番（ここも神の御国なれば）
夕食後、旅館裏手にある湯煙を見ようと外に出ました。温泉の味わいも私にとって夢ごこちで、ただ感歎するのみの一時でした。
夜八時より集会でお言葉を頂きました。
「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんな大きな愛を父から賜わったか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである」（ヨハネⅠ三章一―三）
父から賜わった大きな愛について、学ばせて頂きました。
〝ハレルヤの叫び〟の聖歌を声高らかに讃美しました。
夜も更けて来ましたので、家に電話しました。子供達の声に安心感を抱き、一夜眠りにつく事ができました。
二日目、朝荷物の整理にもたもたしたり、子供達へのお土産を買ったり……などで温泉にも入れず、集会が始まりました。
「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」
（ヨハネ福音書一五・九―十一）
わたしの愛のうちにいなさい、主から賜わる大きな恵みと愛について学ばせて頂きました。そして、今のように生かされ、支えられ、備えられ、感謝しても言い尽くせない大きな愛の中に、日々在る事を痛感しています。
バスの中も楽しいものです。周囲の方達と喋べりながら、移り変わる景色を眺めつつ、主の愛に浸っておりました。
休憩の一時、目の前に海が見えました。湖のような静かな湾は、くつろぎを与えて下さいました。慧洲園での素晴らしい景色、茶畑を散策したり、陶磁文化館では、素敵な美術品に吸い寄せられるような感じでした。
二日間、つかの間に過ぎ去り、楽しかった旅は私の生涯の記録として、心に奥深く残るような気がします。
オー　ハレルヤ主イエスに　さかえあれ
恵みに　満ちあふれけり　きたれ主のたみよ
われらもろとも　日々　さけばん　ハレルヤと……
今日も、生きる喜びをかみしめながら、この歌を口ずさんでいます。
榎本先生御夫妻、共に旅を楽しませて頂いた皆さん、有難うございました。特に幹事の方々、行き届いたスケジュール御苦

労を、心より感謝致します。又、私達のために祈って下さった方々、有難うございました。



主による勝利の喜び

大口和子

いつもお祈りして頂き有難うございます。お陰様で私の足の痛みも大分軽くなり、患者さんの治療もできるようになりました。お掃除も二ケ月半ぶりにぼつぼつできるようになり、嬉しくてなりません。

ひどく痛んでおりました頃、日曜日が近づくとサタンがやってきて、「一回くらい礼拝を休んでも良いではないか」と私の弱みにつけこみ、主に従わせまいとしてしきりにささやいてきます。しかし、じーっとこたつにもぐり込んで休んでいても痛みがとれるわけでもなく、かえって礼拝に出席しなかったことの後悔がこみあげてくるだけだと気づかされ、神様のお力にすがって、「サタンよ退け」と、きっぱり誘惑に勝つことができました。そして、礼拝だけは何としてでも守らせて頂きたいとの願いを強められ、息子夫婦に支えられながら、教会に出席させて頂きました。その時私の心は、勝利の喜びで一杯になりました。

土曜日の夜は、翌日の礼拝週報を知らせて頂き、その中から礼拝順序・讃美歌番号と歌詞・聖書の箇所とみ言葉の全部を、二〜三時間かけて点字に直し、自分用の礼拝ブックを作るのです。

この日以来、主はこの準備の時を祝して下さって、不思議なように痛みをやわらげて下さいました。イエス様にお従いして歩みたいと願う者に、神様が力を与えて下さらないわけがないことを、今一度しみじみ実感致しました。それと同時に、この頑固な痛みを通して私自身の心のかたくななことも示されまして、神様の前に悔い改めさせて頂きました。

そして、イースター礼拝の後の聖さん式に信仰もって出席さ

せて頂き、ばいさんにあずからせて頂きましたことを、深く感謝しております。

六十三年五月

祈り

瓜生　美知子

イエス様に祈りを始めたのは、四十四年頃だったと思います。私の高校の女性の同級生の友人から勧められ、毎日寝る前に祈りました。主の祈りでした。

家庭の事でいろいろ悩んでいた私を見かねたのだと思います。それから、失業や悩みが続きましたが、ある時、私が経理事務をしていた会社の社長が二〇〇万円持ち逃げしたのです。それも従業員のボーナスの払いにと銀行から借りたものでした。しかも、私が社印を押したもので、夢にも思わなかった出来事に目の前が真暗になりました。再び資金調達に銀行に行く電車の中で、バッタリその同級生の友人に逢ったのです。事情を話すと、祈って近々修養会があるので出席するよう勧められたので、約束して別れました。現金は戻りませんでしたが、問題を起こしたのが社長本人でしたので、私の不注意も仕方ない、社長本人が全額返済する、社長も弟さんに代わり、無事解決しました。

その後、修養会に出席し、半年位経ってから洗礼を受けました。すべて、主が私の祈りをお聞き届け下さり、導いて下さったのだと知り、感謝でした。伝道者になりたいと思いましたが、それから病気をして伝道者にはなれませんでした。病気の中でつらい日もありましたが、主の導きで、知らず知らずのうちに証人とされていました。失敗ばかりしていますが、その度に主の導きで、祈りを通して起き上がらせて頂きました。主への祈りは行動を起こさせる原点だと思います。

「何事も思い煩ってはならない。ただ事ごとに感謝をもって祈りと願いをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとをキリスト・イエス

にあって守るであろう」（ピリピ四・六〜七）
また、とりなしの祈りができる特権も神様の恵みであり感謝です。隣り人を愛しなさいと言われる主の御言葉にお従いできる第一歩だとわかりました。
「万物の終わりが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎しで、努めて祈りなさい」（ペテロ第一・四・七）
これからも主にお従いできるように、機会ある毎に祈り続けたいと思っています。

SAVE FROM DEATH

ANONYMITY

今、主の恵みをいっぱい感じています。主は、罪深き、小さな自分を救いの道に導き出して下さいました。
主が共にいて下さいますから、何が起こっても、どんな中を通っても、恐れずに歩むことができ、喜びを感じています。
――〈病気で入院した時〉――
〝この病気は、死ぬ程ではない。それは、神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである〟この聖言によってとても強められて、感謝でした。
主が、私を愛して下さっているのだと確信しています！
私は不信仰な醜い者ですが、主の愛によって魂から生かして下さいます。
初めの頃は、苦しい時には〝なぜ自分だけがこんな目に遭うのか！〟と言い。思い通りにならなければ、〝神様は祈りを聞いてくれないのか〟と言ってました。それどころか、思い通りになれば、〝自分の行いが良いからだ〟〝自分が優れているからだ〟とすぐに高ぶり、悪声ばかり放っていました（今も、あまり変わらないと思いますけれど）。だから、主が哀れんで下さり、拾って下さったのだと思います。
あのままだったらどうなっていたかと思うと、恐ろしくて考えることができません。本当に良かったと、感謝します。
皆様にも祈って頂き、感謝しています。
主の恵みが、兄弟姉妹、その他多くの人に、ありますように。アーメン。

収穫

緒方　とみ子

（その一）

私がクリスチャンの旗印を掲げて、嫁ぎたいと祈って数年。神様のあわれみに支えられ、祈りに答えられ、また多くの聖徒方の祈りにより、アモス書三の三の御言葉を握りしめ、福岡県三井郡北野町（ＪＲ戸畑駅～（鹿児島本線下り）～ＪＲ久留米駅―駅より車で四十分余）に来たのは、戸畑教会が戸畑の地にひらかれた一九八六年四月でした。全く神様を知らない、愛のない家族（主人と息子）だった。冷たい部屋の中で、暗い顔をして話す事も笑う事も少なかったと言う二人でした。私は、そんな家庭に、神様から遣わされたと信じ、エペソ三の十七の御言葉を土台として、日々祈る生活の中で、二人に対する授業が始まった。なんとか、わかって欲しいと言う思いがつのり、変化のない毎日は、耐えられない新生活でした。そんな時、疲労のために深夜、救急病院に。駆けつけた義姉に大変迷惑をかけてしまい、主人から怒られてしまった。四日後にあると言う我家での披露宴も、本当にうらめしく感じたが、悔い改める機会を得ました。

五月四日、主人と一緒に、八幡教会・戸畑教会（ヨハネ二十の三一）に行く事ができて、感謝しました。また、十九日には、福岡大濠公園教会での伊藤重平先生の教育講演会（使徒三の六・エペソ六の四）は、救だった。祖父母に育てられた息子の問題に悩んでいただけに、この御言葉（Ⅱコリント五の七）を与えられたのも、この頃でした。

五月は本当に恵まれた月で、二十五日には、主人の仕事先である福山市に行く途中、トラックから降ろしてくれるという恵みにあずかり、前田教会の伝道会（箴言十九―二三）のお説教を聞いた。無関心な息子と、神様もマリア様もみな同じだと思ってしまう主人との生活の中で、私はため息ばかりついていたが、教会に行く事（私の笑顔が奇麗だと誉めてくれた）には、とても理解を示してくれて、出迎えには、必ずついて来てくれたので、感謝でした。

八月十一日、主人の仕事先（高松）に便乗して、思いもかけない徳島県穴吹町に行く恵みが与えられ、大前桂子姉（脇町教会員）宅に伺う事ができました。手紙での交わりしかない（福岡大濠公園教会で会ったのがきっかけで）私達にとって、このハードスケジュールだった旅での出会いは、本当に貴重なものとなりました。また、姉達の熱い祈りは、心にせまるものがあり、多くの子供達に会えたのも、本当に感謝でした。

十二月二十一日、戸畑教会が開かれて初めてのクリスマス礼拝でした。（ルカ二の十～十一）　残念ながら、主人とは行く事ができませんでしたが、二人で神様を崇める者となりたいと祈ってます。

（一九八六年書）

「わたしは義なる神、救い主であって、わたしのほかに神はない」（イザヤ四五・二一）

（その二）

新年は、私の弟が我家に来ているので、主人と一緒に久留米東町教会（イザヤ五十二章）で礼拝する事になり、主人はとても嬉しそうだった。息子は「神様―おるんネ！」と言うくらいだが、主人は行く機会が与えられているだけに、心に少し響いている様子。しかし、私は昨年の失敗もあるので、神様に任せている。共通の話があればと祈っている所です。また、二つの事件を通して、私は教えられた事があります。二月頃です。お酒の好きな主人は、その日も千鳥足でふらつきながら帰って来ました。そして、確かに台所に置いたと言う給料袋が、どうしてもありませんでした。主人は、「きっとあるから捜せ！」と言ってききませんが、どんなに捜しても見つからずに、当時、本当に困りましたが、義姉のはからいで助かったのです。主人は「よい薬になった！目をさますから許して欲しい」と心から思ったそうです。ところが、一ケ月後に思いもかけない所から出て来た給料袋を見て、主人は「自分の勘は、当っていた！」と。そして、薬は効かずじまいです。私はこの事を通して、いくら人の前で悔い改めても、神様の前での悔い改めがないとダメである事を知りました。それから数日たって、夕方の事です。私は、息子に犬のエサを買いに行かせたのが原因で、警察から呼び出しを受けたのです。私も、友達と一緒に息子がバイクに相乗りしている所を見ていましたが、いつもの黙秘でみのがしていました。主人の留守の家を守るのは、本当に、神様が一緒にいなければ大変です。私も、言わなかった事を悔い改めました。また、戸畑教会の先生にお祈りして頂き、心強く感謝でした。

五月三日（博多どんたく）福岡大濠教会に行く機会が与えられ、主人と共に御言葉（Ⅰコリント六の一九）を聞きたいと祈っていましたが、「教会に上がるのは」と、やはりためらいま

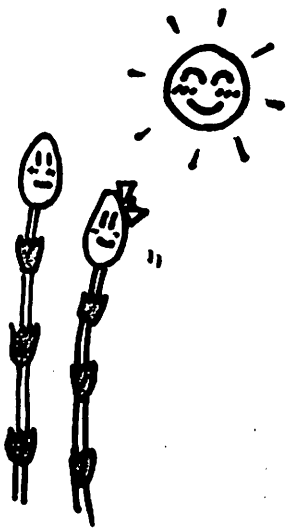
したが、正野家の子供達（聖美さん、栄子さん、敬士君）とは、いつも仲良しなので感謝です。夏に、雑草ばかりはえている一坪程の空地に、「野菜を植えて見ては！」と、隣のおじさんが言ったのがきっかけで、野菜を作る事になりました。義姉や友達の助言のもとに、おもしろい程に取れた「トマトとナスビ」。雑草に負けた「シシトウ」。たわし作りを楽しんだ「ヘチマ」。奇麗な花が咲き、小さな実だった「カボチャ」。窓から手を伸ばして取れた「つるなし豆」など。「戸畑の家では、とてもできない事だ」と主人から言われ、多くの収穫で楽しみの一つになり、神様のみわざの素晴らしさに感謝しました。日頃は主人に仕え、留守の日は野菜作り、夜は内職（かすりの服作り）。本当に、聖書を読まず、肉的な楽しみにひたっていて、私の心はからっぽだったと思います。以前から、主人は仕事先で、福音放送を聞いていて感動したと言う話を聞いてはいましたが、別に私は心にとめてはいなかったのです。すると、主人は聞きかじった言葉を、しきりに私に尋ねるのですが、私は、聖書を読んでいませんから教えられません。時々、神様の話で口げんかするようになりました。また、日曜礼拝に疑問を感じるような出来事にも出会い、サタンにとりつかれました。私は、神様に対して思い上がりを感じ、悔い改めました。すると、すんなり教会にも出かけられるように神様がして下さったのです。

八月十六日、お盆休みを利用して、戸畑教会礼拝（ヘブル人四―一一）に出ました。親思いのやさしい主人ですから、父の墓参りをかねて出かけましたが、いつも先生に話を聞いてもらうのを楽しみにしています。なかなか神様の話題にならないから、私の方がイライラしていますが、ヨブの忍耐を常に覚えます。

十二月六日、故父の十年目の召天記念日でした。主人と一緒に行きたいと祈っていましたが、仕事のスケジュールが合わずに、残念ながら、Ⅱテモテ四・八の御言葉は聞けませんでした。礼拝後、伊規須牧師より、クリスマス礼拝の誘いがありましたが、私は待ち望んではいませんでした。出席したいとは思っていましたが、主婦業が主人の言葉（またか？）などを気にしていました。しかし、意外な事を神様が主人の心をかえてしまったのです。「東町教会よりも、戸畑教会がいい」。そして、「俺も今度、一緒に行くゾ」と、はりきって言うではありませんか。私は、おもわず「無理しないでいいよ。週三回で多忙でしょう」と、言ってしまっ

たのです。ところが、主人いくら早く帰り着いても、昼になります。ひょっとしたら、感謝会に……と思いましたが、高速四〇㎞の所を一〇〇㎞位出して走りまくる無鉄砲者。チャンスがないナァと思いましたが、時は神様の手の中にあると教えられた事を思い出し、神様に任せようと祈りました。私が一足早く行く事になり、クリスマス礼拝（ルカ伝）一年の感謝会（詩篇一〇三篇）の恵みにあずかりました。本当に自分の思いは様々で、いつも野に咲く草花のように、風にゆれた状態でいますが、神様の道に目をとめて歩いて行きたいと祈っています。そして、この「収穫」の証を、この北野の地（遣わされた地）で書き続けて行きたいと祈っています。　（一九八七年書）

「主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ」（イザヤ五五・六）



父の思い出

正野真宏

私の父が天に召されたのは、昭和六十一年三月二十七日である。早いもので、もう二年を経過した。父の遺影は、今も居間に飾ってはいるが、父のことを考えることも少なくなってきた。そんな自分が淋しくなり、父のことを記録しておきたいと思うようになった。そう考えてとりかかってみたものの、父は自分のことを話すことはほとんどなかったし、私から聞くこともなかった。自分の父でありながら知らない部分が多いのに気づいたが、後の祭りである。記憶をたどりつつ、不明の点は姉や親戚に聞きながら整理してみた。

〈父の生いたち〉

父は明治三十九年十二月六日、旧門司市で生まれた。母の名は川面タツ、父は戸籍上は石田光太郎となっているが、本当の父は石田由太郎といった。父は正式の結婚によって生まれたのではなかった。この生いたちが、父の人格形成や人生に大きな影響を与えたことは言うまでもない。

当時、石田家といえば門司では知らない人はない程の素封家で、実父由太郎の父平吉は男爵の称号を持ち、爵位廃止後は貴

族院議員になったと聞く。
家業は、門司港の一等地で石田旅館を経営しており、また、石田桟橋という船着き場も持っていた。石田旅館には、当時の皇室やシーボルトも宿泊したという由緒ある旅館であった。祖父平吉のもとには市長や有力者達が絶えず出入りして、その接待が大変だったようである。
平吉は、ワンマンな殿様のような人で、奥さんでも許可なくしては何事もできなかったという。子供達も父に呼ばれた時は、たとえ夜寝ていても正服に着替え、フスマを開けてその手前に正座し、話を聞かねばならなかったというほどである。自然、家の中は暗く、ゴタゴタが多かったようである。
跡とり息子の由太郎が川面タツと恋仲になった。しかし、平吉は家柄が違うことを理由に頑として結婚を許さなかった。そして生まれたのが、私の父義雄である。認知もしてもらえなかった。父は父なし子として、母のもとで育った。母タツは典型的な日本女性で、よくできた人であったらしい。
私の家には、由太郎の写真はない。いつか親戚の家で見せてもらったことがあったが、父かと思うほどに生き写しだったので、びっくりしたことを思い出す。
このような境遇の中に生まれ育った父は、どんな気持で少年時代を過ごしたことだろう。今日と違って、当時は私生児に対する風当りも強かったであろうし、周囲の冷たい視線を、父は小さい時から感じていたに違いない。実の父親に会うことも許されなかったであろう。そして、母の悲しみを見ていた。母タツの表情の奥に秘められた悲しみを見、子供心に焼きつけてきたに違いない。
いずれにしても父は、恵まれた少年期ではなかった。明るい闊達な子というより、無口で消極的、けれども心やさしい子ではなかっただろうか。自分の生まれた境遇は如何ともしがたい。反発することもできず、ただそれを自分の運命として受け入れ、耐え忍んでいくほかない。そういう処生術が身についていったと思われる。受容と忍耐――それが父が生涯かけて貫抜いた哲学であったような気がする。

◎　ぜんまい煮　亡母（はは）の香りに　近くあり　（父の作）

その後、父は門司商業高校に進学した。テニス部に入って、ラケットを持って写っている写真が残っている。ある時、父が両手を差し出して、テニスの練習で右手の方が長くなっていると自慢気に話していた。主将をしていたようだが、戦績の方は聞いていない。
門司商業を卒業後、一時、大連の方に行ったこともあるようであるが、十九才頃、石田家に入り旅館の手伝いをするように

なった。どういう事情でそうなったのかわからない。母タツが再婚したことも影響しているのかもしれない。しかし、祖父平吉に受け入れてもらえず、複雑な家族関係の中で肩身の狭い思いをしていたのではないだろうか。ここで腹違いの妹と出会う。この妹（東京在住、病院長未亡人）が生涯を通じて父の一番の理解者となった。

父が石田家に入って二年ぐらい経った時、祖父平吉と父由太郎が相継いで亡くなり、家業は由太郎の弟光太郎が継いだ。このことで、父の運命もまた別の道へと進んでいったようである。

石田家を継いだ光太郎は遊び人で、事業を続ける力はなく、日ごとに没落していった。いつか下関で信徒会が開かれた帰りに、父と門司港に寄ったが、石田旅館跡に富士銀行が建っていて、父が懐かしそうに眺めていたのを思い出す。石田家は今はその名もなくなっている。「長者三代続かず」のことわざのとおりである。

＜父の結婚＞

昭和七年一月、父は正野嶺吉の三女サカエと婿養子縁組をした。父は二十五才、母は十九才であった（この時父は漸く石田家の認知を受けた）。

当時、私の祖父嶺吉は、旧八幡市西本町（現在の青果市場附近）で大きな木材卸業をしており、母は八幡高女を卒業後、祖父の片腕として、店の切りもりから数多い店員たちを使うことからほとんど一人でやっていた。祖父は母の力量を買い、この娘に跡を継がせようと婿養子をとったわけである。しかしそれは、母の弟がまだ小学校に上がるか上がらないかであり、成人するまでの継ぎ役でしかなかった。そういうこともあって、あまり文句をいわず、忠実で家柄もよいということで、父が選ばれたのではなかっただろうか。この話が出た時、成り上がり者の祖父は、名家と親戚になるということで大変喜び飛びついたという。

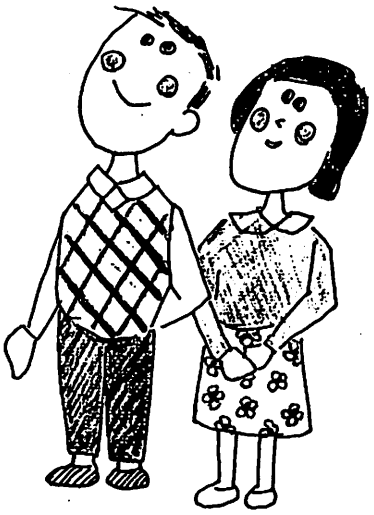
結婚話は、母の気持とは関係なく、祖父がどんどん進めていった。

結婚式は自宅で盛大に行われた。随分大きな屋敷だったようである。披露宴は朝昼晩三日間ぶっ通しで行われ、大きな酒樽が玄関に自慢気にいくつも積み重ねられたとか。その間、父と母は宴席にはべらされ、特に母は大変だったようである。休憩

時は、二人は小さな部屋に入れられて次の出番を待っていたが、その間中、父は花嫁に一言もしゃべらなかったらしく、母はこの時のことが後々まで不満として残ったようである。女心としてはそうかもしれない。それほど父は無口で純情だったということである。それまで二人が顔を合わせたのは、見会いの時一度きりであった。父としても花嫁に対するいたわりと思いやりの気持は十分もっていたはずである。しかしそれを口に出し、表現することが苦手というか、ヘタなのだ。父は死ぬまでヘタなままだった。それで人に理解されず、損をすることがどんなに多かったことだろう。私は父のためにそのことが残念でたまらない。なぜ父はそこを克服しなかったのかと……これはやはり父が育った境遇というものを理解しなければならないことであろう。小料理屋を始めた母は、夜が遅く、一人で過ごすことも多かったのではないだろうか。

若い頃の父は、歌舞伎役者のような美男子で若い娘がついて廻っていたらしい。しかし、父はふり向きもしなかった。自分の母の悲しみを見てきた父は、男は決して女を泣かせてはならないと固く心に決め、ひたすら妻を愛し続けたのであった。

（私たち息子にも説教らしいことは一度もしなかったが、「女だけは泣かすことはするなよ」といったことが印象に残っている）



それにしても、厳格な祖父と母の妹達（小姑）五〜六人もいる大家族の中では、気苦労も多かったことだろう。

＜父と事業＞

婿養子になって、母と共に材木業をやることになったが、もともと事業には向かない。お人好しで小心者。海千山千の多い業界の中では損ばかりしていたのではないだろうか。いきおい、祖父から叱られることが多くなる。

祖父は、宗像郡吉武村から若い時出てきて、祖母と共に丁稚奉公から叩き上げ、材木業を興した生粋の商売人である。八幡で一番に市場を建てたのも祖父であり、母は立志伝中の人だと自慢していた。その祖父の目から見て、父の生ぬるさは歯がゆかったに違いない。

私の父は誰が見ても事業家向ではない。むしろ、決められたことを忠実に果たす事務屋さんであれば、その能力を発揮しただろう。祖父は、父のどこを見込んだのか知らないが、選んだ以上は育てる責任があるというものだが、父の無能を責めた。

ある時は、気性の激しい祖父から「家を出ていけ」と罵倒されたが、その時も父は頭をタタミにすりつけて誤ったという。恐らく父は、私達子供を自分と同じように父なし子にしたくなかったのだと思う。父の愛を知った第一のことである。

その後、父は母にいつまでもここにいるべきではない、やがて弟が成人した時、自分達は出て行かなければならない、先の保障はない、今の若い内に独立すべきだと話したらしい。さすがに父は男である。その判断は正しい。しかし、母は受け入れなかった。母は祖父を尊敬していた。その時はそれ相当のことはしてくれる、約束を違えることはないと祖父を信じ込んでいた。もし、ここで母が父に従っていたら、父の力が生かせる道も開け、人生も変わってきたのではなかろうか。しかし、母にとって祖父の存在はあまりにも大き過ぎた。祖父から離れることは考えられなかった。

ここでも父は夫婦別れをさけるため、自分の思いを胸にしまい込んだ。

その後、父は大分県の方に山の原木買い付けのため留守をすることが多くなった。そういうことで、店の方は母が中心となって動いていく。このため母は、子供に乳を飲ませるヒマもないほどであった。私が一才の時、セルロイドのオモチャを火鉢に投げ入れて、顔を大ヤケドしたのも、母が忙し過ぎて放たらかしになっていたためである。

私には八幡時代の記憶はほとんどない。幼稚園に行ったことと、近くの豊山神社の石段が広くて長かったことを覚えている（実際はそんなに大きくないのだが）。

〈父の出征と疎開〉

昭和十七年か十八年に父に召集令状が来て、出征した。確か佐世保の海軍ではなかったかと思う。幸い内務班配属だったので戦地に行くことはなかった。

父が出征している間に戦争がひどくなり、米軍上陸が伝えられるようになった。このため昭和十九年の夏、私達家族は大分県東国東郡櫛来村に疎開した。そこに祖父の製材工場があったからである。姉が尾倉小学校四年生、私が一年生、弟の隆士は三才、暢之は生後七ケ月ぐらいの乳飲み子だった。

大分の方から材木を運搬してきた船の帰り便を利用し、私達家族と家財を乗せて行くことになった。おぼろ気ではあるが、夕日に映える汽車の線路と美しい海浜を覚えている。今考えると日明港ではなかっただろうか。船は早朝に出帆した。子供に

とっては本当に楽しい船旅だった。

この大分の地で私達は六年間生活した。終戦後まもなく父も帰還した。そして製材業を営むことになるが、事業は必ずしもうまく行かなかったようである。しかし、父にとっては、祖父の目も届かず、小さな村の名士でもあり、また親子水いらずの生活ができたのであるから、一番幸せな時ではなかっただろうか。

◎ いわし雲　櫛来の浜の　昼さがり

◎ 朝霧に　姫島うすれて　鳥流る　（父の作）

そういう生活も長くは続かなかった。母の末弟（長男）が大学を卒業すると同時に、製材所を継ぐことになり、私達は追い出されることになった。昭和二十五年の夏、私が中学一年の時、私達家族は、福岡県宗像郡東郷町日熊に引越した。

このことは、父母にとっては耐えられない屈辱であり、四人の子供をかかえ生活のめどもなく、大きな試練であったはずである。しかし今にして考えてみるに、ここに見えざる神の御手が働いていたことを思い感謝に耐えないところである。もし私達が櫛来村に留まっていたとしたら、どういう生涯を送っていることだろう。父と母は泣きの涙で櫛来村を後にしたが、そのことによって生ける神に出会うことができたのである。

この東郷での生活が、我家にとっては大きな転換期、舞台であれば第二幕となり、クライマックスを迎えることになるが、随分長くなってしまいそうである。続きは次回に譲ることとしたい。

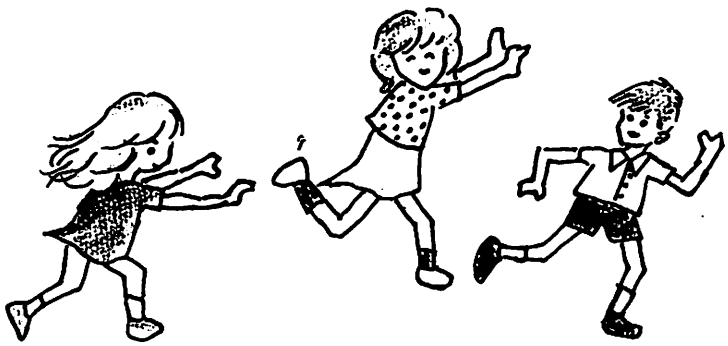
◎ 生甲斐を　神の御名にと　仰ぎつつ

◎ 聖堂に　心新たに　年始め

◎ 病む友に　今日の祈りの　ながき妻

◎ 我のみを　照らせる如く　秋の月

◎ 妻のさす　日傘にいつか　寄りており　（父の作）



編集後記

。皆さんの御協力で「ぶどうの木」第十七号を発行することができました。

。今回の投稿数は三七篇にものぼり、過去最高となりました。昭和四十年に発行した第一号は十三篇でしたから、約三倍にも成長したことになります。

。現在の北九州市は、構造不況によって経済的にも停滞し、活性化の取組みがなされておりますが、私達は主に連なることによって、年々成長させていただいていることは、誠に感謝です。

。真の活性化は、経済的な向上よりも一人ひとりの魂の復興、活性化によってなされるものと思います。

「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」とあるとおりです。

。「ぶどうの木」は、信徒の交わりの場でありますが、同時に一人ひとりが主の御言に従うことによって活力が与えられた証しの記録でもあります。

。「ぶどうの木」が、この時代にあって「彼らの間で星のようにこの世に輝いている」（ピリピ二・一五）となるように願っています。

。表紙の絵は水村光義兄、カットは木原桂子姉が担当して下さいました。

昭和六十三年八月

昭和63年12月25日
編集者　ぶどうの木委員会
発行者　基督伝道隊
　　榎　本　利三郎
印刷所　トンボ印刷所
発行所　基督伝道隊
　　福岡大濠公園教会
　　戸　畑　教　会
　　八　幡　前　田　教　会
北九州市八幡東区前田1―10―3